

公益財団法人古代学協会

2024（令和6）年度 年報



2025（令和7）年

公益財団法人 古代学協会

目 次

I 古代学協会について

- 1. 設立の趣旨と目的 1
- 2. 古代学協会の歴史 1

II 管理・運営概要

- 1. 理事・監事・評議員 7
- 2. 名誉理事長・顧問・参与 7
- 3. 職 員 7
- 4. 組 織 8
- 5. 施 設 9

III 令和 6（2024）年度事業概要

- 1. 理事会・評議員会 11
- 2. 決 算 11
- 3. 角田文衛博士顕彰事業
 - (1) 「角田文衛古代学奨励賞」 12
- 4. 研究事業

【古代学協会による個人・共同研究】

- (1) 日本の後宮の研究 14
- (2) 紫式部研究 15
- (3) 平安京研究の再構築 15
- (4) 陵墓研究 15
- (5) 中国古代の東北フロンティア開発と楽浪郡 15
- (6) 弥生時代像の変質と時空間区分原論 16

【研究事業による出版】

- (1) 『史実でたどる紫式部―「源氏物語」は、こうして生まれた。』 19
- (2) (公財) 古代学協会研究報告第 18 輯『平安宮豊楽院の調査』 20

【科学研究費助成事業による研究】

- (1) 初等・中等教育における考古学的活動に関する基礎的研究：
学校考古学史の構築に向けて 20
- (2) 『色葉字類抄』の語彙研究および総合データベースの構築 21
- (3) 仁和寺文書調査資料のデータベース構築 24

5. 『古代文化』刊行事業	
(1) 編集委員会（令和 6 年度）	26
(2) 『古代文化』の刊行 第 76 巻第 1 号～第 4 号	27
6. 普及事業	
(1) 古代学講座	30
(2) 顕彰碑の設置及び除幕式・修理	37
(3) 公開講演会など	37
(4) 広報物の出版	39
(5) 資料等の活用・管理・整理	40
7. その他	
(1) ホームページ	41
(2) 公式 Facebook	41
・ 所蔵資料一覧	42
・ 令和 6 年度 交換・受贈逐次刊行物一覧	45

I 古代学協会について

1. 設立の趣旨と目的

角田文衛博士（1913～2008）は、考古学と文献学を総合した古代史研究の新しい方法論を樹立すべく、「古代学」という学問体系を提唱。これまでにないアカデミックな学術雑誌『古代学』の刊行は、その高度な体裁や内容において当時の日本の学界に少なからず影響を与えた。角田博士は世界史的視野のもと、考古学・文献学の双方を駆使して、理論ならびに個別研究を生涯にわたり情熱的に推進し、また学史研究にみられるように先人の業績を大いに尊重する一方、熱心に後進の古代史研究者を育成した。古代学協会創設の中心となり主導してきた角田博士は古代学協会そのものであると言っても過言ではなく、逝去後は博士を顕彰するとともに、博士の理想を受け継いだ研究を継続するための諸事業（季刊誌『古代文化』および研究報告の刊行、将来ある若手研究者の助成を目的とした「角田文衛古代学奨励賞」、公開講演会、共同研究、各個研究など）を通じて学術文化の向上・発展に寄与することを目的として活動が続けている。また、テーマに基づき講師を招いての「連続講座」、半期ごとに一つのテーマで深く古代史を学ぶ「古代学講座」の開催。一般読者にも読みやすい広報誌「土車」の刊行も進めている。



故 角田文衛博士

2. 古代学協会の歴史

昭和 26 年（1951）

10 月 古代学協会創立（事務所・大阪市立美術館内）。

昭和 27 年（1952）

1 月 季刊誌『古代学』創刊号（第 1 巻第 1 号）刊行。

昭和 28 年（1953）

10 月 福井県二上遺跡（糞置荘・二上遺跡）において、古代学協会初の発掘調査実施。

昭和 30 年（1955）

12 月 古代学協会設立発起人会開催。

昭和 32 年（1957）

1 月 民法第 34 条による財団法人古代学協会認可。本部所在地を大阪市立美術館として登録。初代理事長梅田良忠、常務理事角田文衛、山県忠次郎就任。

4 月 古代学協会東京支部開設。引き続き、昭和 37 年に仙台支部〔のちに東北支部〕開設・広島支部〔のちに中国支部〕開設、昭和 40 年に札幌支部〔のちに北海道支部〕、名古屋支部〔後に東海支部〕、福岡支部〔後に九州支部〕開設、昭和 62 年に四国支部、昭和 63 年に北陸支部をそれぞれ開設。

10 月 季刊誌『古代学』のサロンの雑誌として月刊誌『古代文化』を創刊。

11～12 月 勸学院跡発掘調査（中京区西ノ京勸学院町・姉坊城児童公園）を実施。

昭和 34 年 (1959)

10 ～ 12 月 大極殿跡発掘調査を実施（上京区千本丸太町小山町・内野児童公園内）。

昭和 35 年 (1960)

12 月 古代学協会京都事務所の土地、建物購入（京都市下京区下鴨上川原町）。

昭和 37 年 (1962)

10 月 大分県丹生遺跡第 1 次発掘調査開始（最終年〔第 6 次〕昭和 42 年〔1967〕）。

昭和 40 年 (1965)

11 月 紫式部邸宅跡（廬山寺境内内庭）に顕彰碑建立除幕式举行。

昭和 41 年 (1966)

5 ～ 6 月 売却予定であった旧日本銀行京都支店の建物の保存と活用希望を日本銀行に申し入れ全国募金による資金での購入が決定。

昭和 42 年 (1967)

4 月 旧日本銀行京都支店の土地、建物を日本銀行より有償譲渡を受け、同地に京都事務所を移転し、平安博物館を創設（初代平安博物館館長に角田文衛常務理事が就任）。

9 月 本部所在地を、大阪市立美術館内より旧日本銀行京都支店に移転、京都事務所を閉鎖。

11 月 平安博物館土曜講座を開始（昭和 43 年〔1968〕以降は古代学講座と改称し、毎日開講することとなる）。



平安博物館 清涼殿実物大模型

昭和 43 年 (1968)

5 月 三笠宮崇仁親王殿下、同妃殿下の台臨を仰ぎ、平安博物館開館式举行。

7 月 平安博物館の建物が、京都府登録博物館の第 1 号に登録される。

9 月 大島本源氏物語（青表紙本、53 帖、国指定重要文化財）が平安博物館に収蔵される。

昭和 44 年 (1969)

3 月 平安博物館の建物（旧日本銀行京都支店本館と金庫）が重要文化財に指定。

4 月 平安博物館友の会結成。初代会長に塚本幸一（ワコール社長）就任。

10 月 日本考古学協会昭和 44 年度大会が、平安博物館において開催される。初日、開催反対の学生デモ隊乱入、機動隊に逮捕される。

昭和 47 年 (1972)

3 月 季刊誌『古代学』、第 18 巻第 2 号をもって休刊。

昭和 48 年 (1973)

4 月 平安京跡発掘調査本部の設置（昭和 57 年まで）。

昭和 49 年 (1974)

11 月 清少納言顕彰・歌碑建立（泉涌寺境内）。除幕式举行。

昭和 52 年 (1977)

4 月 広報誌『土車』第 1 号を刊行（以後現在まで継続）。



青表紙本 53 帖

5月 古代学協会創立 25 周年・平安博物館設立 10 周年記念式典挙行（平安博物館会議室）。
記念特別展「北ヨーロッパの新石器文化展」開催。

昭和 56 年（1981）

9～12 月 エジプト・アコリス遺跡（中部エジプト、ミニア県テヘネ村）第 1 次発掘調査開始（最終年〔第 12 次〕平成 4 年〔1992〕）。

昭和 58 年（1983）

10 月 京都府京都文化博物館の創設に協力するため、平安博物館本館建物とその敷地を除く北側土地を京都府に譲渡。

昭和 60 年（1985）

12 月 エジプト・アコリス遺跡発掘調査のための拠点・調査団宿舍「ドムス平安」完成。

昭和 61 年（1986）

3 月 古代学協会の施設、平安博物館閉館。平安博物館友の会解散決定。

4 月 京都府の京都文化博物館創設に協力するため、平安博物館の土地・建物・府下京北町黒田所在の収蔵庫用地、多数の図書、研究資料等を京都府に寄附。並びに博物館の機能、発掘調査出土遺物を移管。

8 月 京都府は、京都文化財団設立。その経営にかかる京都府京都文化博物館の新築工事着工。

10 月 古代学協会職員のうち、一部を除く全員が京都文化財団へ移籍。

昭和 63 年（1988）

9 月 古代学協会の本部事務所は、京都府京都文化博物館別館の復元工事完了に伴い現在地に戻る。

古代学協会は附属施設平安博物館を改組して古代学研究所を設立。

10 月 京都府京都文化博物館開館。

平成元年（1989）

12 月～翌 1 月 イタリア・ポンペイ遺跡予備調査実施（イタリア、カンパニア州ポンペイ市）。

平成 2 年（1990）

6～7 月 山岳寺院・如意寺跡（第 1 次）地上調査開始（如意寺調査会への協力）。

10～12 月 イタリア・ポンペイ遺跡第 1 次地上調査開始（最終年〔第 3 次〕平成 4 年〔1992〕）。

平成 3 年（1991）

10 月 古代学協会創立 40 周年記念学術講演会と、第 1 回シンポジウム開催「山岳寺院の諸問題」。

平成 5 年（1993）

9～12 月 イタリア・ポンペイ遺跡第 1 次発掘調査開始（最終年〔第 14 次〕平成 19 年〔2007〕）。

平成 6 年（1994）

4 月 平安建都 1200 年記念『平安時代史事典』（角川書店）刊行。

6 月 平安建都 1200 年記念『平安京提要』（角川書店）刊行。

9 月 仁和寺所蔵文書、典籍類の調査開始。



平成7年（1995）

2月 エジプト・アコリス遺跡発掘調査総括報告書『AKORIS』（英文）刊行。

9月 西方古典文化研究所（イタリア・ボンペイ市）開設。

平成8年（1996）

5月 大島本源氏物語（重要文化財）影印本刊行。

平成10年（1998）

3月 「初期王権の総合的研究」開始（平成15年『古代王権の誕生』（角川書店）全4冊刊行まで）。

平成11年（1999）

11月 年誌『仁和寺研究』第1輯刊行。（第5輯 平成17年〔2005〕まで刊行、令和6年〔2024〕第6輯を仁和寺伝法所から刊行）

平成13年（2001）

12月 古代学協会創立50周年記念行事挙行。学術公開講演会（京都新聞文化ホール）、式典、祝宴開催（京都ホテル・翠雲の間）。

平成17年（2005）

12月 『古代文化』第57巻第12号（通巻563号）をもって一時的に停刊。

平成18年（2006）

10月 京都大学教授の山中一郎氏に、『古代文化』編集の要請を行い、月刊誌から季刊誌に変更。第58巻の刊行を再開。

12月 古代学研究所の閉鎖。

平成19年（2007）

4月 古代学協会内において編集委員会を再編成し、新たに『古代文化』第59巻の刊行を始める。

9月 古代学協会ホームページを開設。

10月 共同研究「仁明朝史の研究」開始（平成22年度まで）。

平成20年（2008）

3月 支部組織（北海道・東北・東京・北陸・名古屋・中国・四国・九州）廃止。

5月 角田文衛博士逝去。

平成21年（2009）

3月 「角田文衛先生を偲ぶ会」を開催（於：京都ホテルオークラ・暁雲の間）。

平成22年（2010）

11月 ボンペイ遺跡発掘調査の総括報告書『POMPEII Report of the Excavation at Porta CAPUA1993－2005』（英文）刊行。国際シンポジウム「ボンペイとオスティア古代ローマ都市発掘の最前線」開催。日本大学文理学部史学科、神戸大学人文学研究科海港都市研究センター、京都大学大学院工学研究科建築学専攻、上智大学文学部史学科との共催（於：キャンパスプラザ京都）。

平成23年（2011）

2月 角田文衛監修・財団法人古代学協会編『仁明朝史の研究』（思文閣出版）刊行

4月 会友・会員制度を改正、会友を正会員に移行し、新たな会員規程を制定。

「古代学講座」を再開。

10月 古代学協会創立60周年記念行事挙行。角田文衛古代学奨励賞第1回授賞式。記念講演 上田正昭先生「角田古代学の発展的継承を目指して—60周年によせて」（於：京都ホテルオークラ・暁雲の間）。

12月～翌2月 「古代学協会所蔵 古文書・古典籍の世界展」開催（於：京都文化博物館）。

2月 講演とシンポジウム「列島における初期稲作の担い手は誰か」開催（於：福岡市アクロス福岡）。

平成24年（2012）

3月 公開研究会「弥生文化の始まりを問い直す—その担い手はだれか？—」開催（於：同志社女子大学 今出川キャンパス）。

4月 朝日カルチャーセンター京都・古代学協会共催講座の開催（平成27年まで）。

平成25年（2013）

2月 佛教大学四条センター提携講座開始（令和元年度まで）。

4月 内閣総理大臣の認定を受け、「財団法人古代学協会」を解散し、「公益財団法人古代学協会」として、新たなスタートをきる。

平成26年（2014）

3月 下條信行監修・（公財）古代学協会編『列島初期稲作の担い手は誰か』〔すいれん舎〕刊行

平成29年（2017）

10月 『角田文衛の古代学』刊行開始。「4 角田文衛自叙伝」刊行。

平成30年（2018）

7～9月 「平安博物館回顧展 古代学協会と角田文衛の仕事」開催（於：京都文化博物館）。

8月 「平安博物館回顧展—古代学協会と角田文衛の仕事—」記念シンポジウム（京都文化博物館と共催）「世界の博物館史と平安博物館 —ICOM（国際博物館会議）京都2019を据えて—」開催（於：京都文化博物館別館ホール）。

10月 『角田文衛の古代学1 後宮と女性』刊行。

森岡秀人・（公財）古代学協会編『初期農耕活動と近畿の弥生社会』〔雄山閣〕刊行。

令和元年（2019）

8月 公益財団法人移行後、初めての独自開催による公開講演会の開催。

定款を変更し、収益事業としての駐車場の管理に関する事業を廃止。

9月 シンポジウム「京の翠とわざの粋—緑釉陶器と緑釉瓦—」（京都文化博物館と共催）を開催（於：京都文化博物館別館ホール）。

令和2年（2020）

4月 新型コロナウイルスの感染拡大のため緊急事態宣言が発出。これにより事業に大きな影響を受けた。古代学講座は、6月まで休講。7月から感染症予防対策を施して再開した。

9月 令和2年度京都府地域交響プロジェクトの申請が採択され、補助金の交付を受けた。これに伴い「古代宮都歴史散策事業」がスタートした。

10月 古代宮都歴史散策第1回「伏見深草古寺跡を訪ねて」開催。参加人数34名。

11 月 古代宮都歴史散策事業第 1 回講演会「平安京邸宅群の居住者像をめぐって―長岡京・平安京の最新成果から―」を開催（於：ハートピア京都大会議室）。

令和 3 年（2021）

2 月 古代宮都歴史散策事業の一環として 2 基の顕彰碑及び説明版の設置及び除幕式を行う。
「貞観寺跡―藤原師房の発願―」（深草中学校正門横花壇）、「長岡宮西方の宮殿跡」（美容院ガーデン i f 敷地）。

令和 4 年（2022）

7 月 「此附近 藤原定家一条京極第跡」（京都市立京極小学校花壇内）（京都市上京区染殿町 658）の顕彰碑及び説明板の設置及び除幕式を行う。

令和 5 年（2023）

9 月 「堀河院跡」京都市立京都堀川音楽高等学校正門前花壇内（京都市中京区押小路町 238-1）の顕彰碑及び説明板の設置及び除幕式を行う。

12 月 内閣総理大臣臨時代理による収益事業廃止の認定書受領をもって、定款変更を行い、事業から収益事業を廃止。

令和 6 年（2024）

8 月 （公財）古代学協会編『史実でたどる紫式部―「源氏物語」は、こうして生まれた。』（光村推古書院）刊行。

9 月 「一条天皇皇后 藤原定子二条宮跡」然花抄院京都室町本店（京都市中京区室町通二条下ル蛸薬師町 271-1）の顕彰碑及び説明板の設置及び除幕式を行う。

〈参考〉

（財）古代学協会編『古代学協会 60 年史』（思文閣出版、平成 23〔2011〕年）

（公財）古代学協会・京都文化博物館編 京都文化博物館開館三〇周年記念『平安博物館回顧展 古代学協会と角田文衛の仕事』（平成 30〔2018〕年）

Ⅱ 管理・運営概要

1. 理事・監事・評議員

理 事（7名）

（理事長） 臈谷 壽 同志社女子大学名誉教授
（副理事長） 山田 邦和 同志社女子大学特任教授
（業務執行理事 常務理事） 麻森 敦子 （公財）古代学協会
（業務執行理事 専務理事） 山崎 千春 （公財）古代学協会

佐々木達夫 金沢大学名誉教授

浅野伊都子

竹居 明男 同志社大学名誉教授

監 事（2名）

徳永 裕 元（公財）古代学協会経理主任
南部 啓子 税理士

評 議 員（6名）

（評議員会長） 森田 雅之 京都成蹊法律事務所所長
西村 勝 柊屋（株）会長・相談役
吉田 章 三菱京都病院名誉顧問
野崎 貴典 古典の日推進委員会アドバイザー
江里 康則 平安佛所 仏師
兼本 泰興 元NHKアナウンサー

2. 名誉理事長・顧問・参与

名誉理事長 大坪 孝雄 王子ホールディングス（株）社友

顧 問

坂詰 秀一 立正大学名誉教授
中井 義明 同志社大学名誉教授
下條 信行 愛媛大学名誉教授
澤田 瞳子 小説家

参 与

左納 徹郎 元（公財）古代学協会理事
吉川 真司 京都大学名誉教授
山本 淳子 京都先端科学大学教授

（以上 令和7年7月1日現在）

3. 職 員

【研究部】

研究部長：山田 邦和

研究員：古藤 真平

客員研究員：森岡 秀人、平田 健、市川 創、辻村 純代、田中 俊明、山中 章、飯田 祥子、

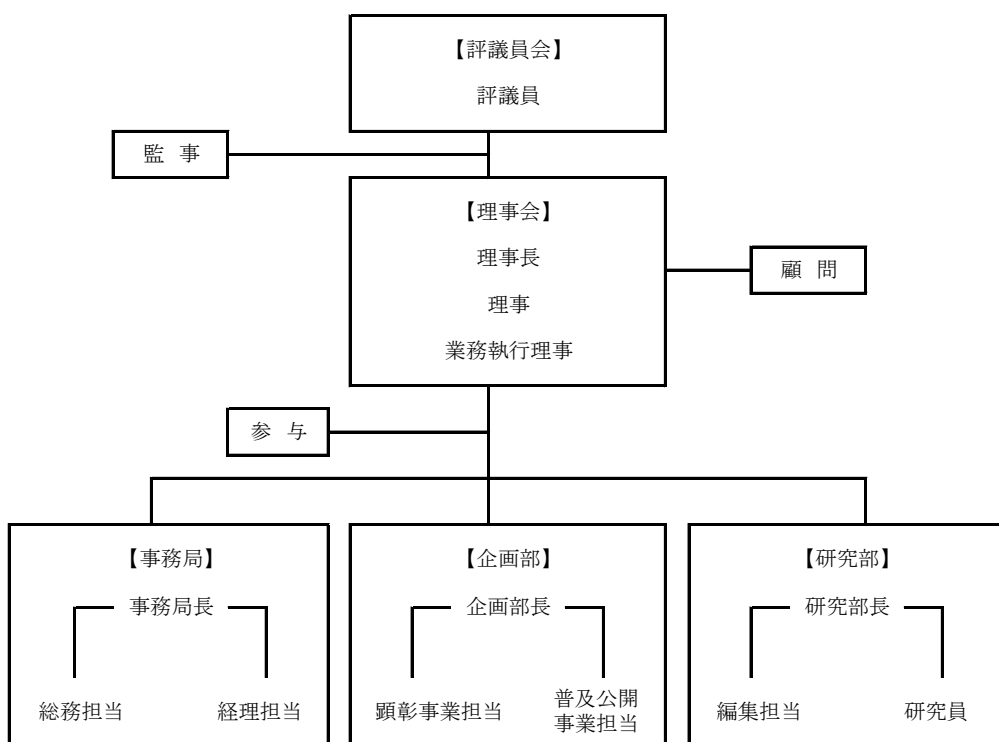
清水 みき、藤本 灯、植山 茂、村野 正景、野口 孝子、藤本 灯、高木 博志

『古代文化』編集主任：横大路綾子

【企画部】 企画部長：山崎 千春

【事務局】 事務局長：麻森 敦子
志谷紀美子、竹内 千津

4. 組 織



5. 施 設



京都文化博物館別館（旧日本銀行京都支店）

所在地：京都市中京区三条通高倉
西入ル菱屋町 48 番地

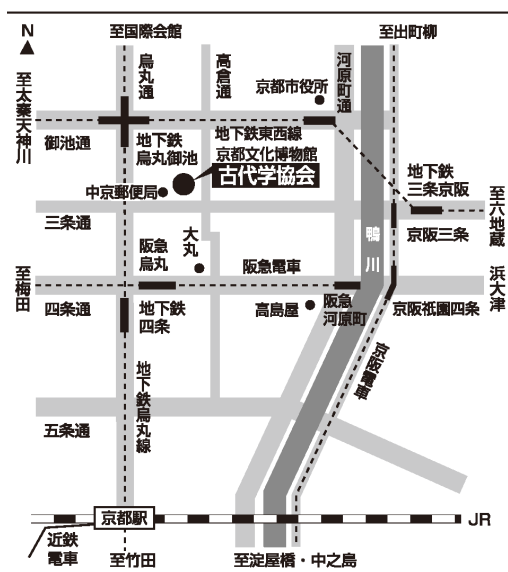
1906（明治 39）年に日本銀行京都支店として建設されたこの建物は、当時日本第一の設計者といわれ、日本銀行本店、東京駅などを設計した、東京帝国大学工科大学教授辰野金吾博士が日本銀行建築部技師長の長野宇平治博士と共に設計した。辰野式ルネサンスの名で呼ばれた彼の様式が発揮された建物である。

1965（昭和 40）年に日本銀行京都支店の移転に伴い、1967（昭和 42）年 4 月、当協会が日本銀行より旧店舗と敷地約 1800 坪を有償譲渡され、平安博物館として 1968（昭和 43）年 5 月オープンした。

1969（昭和 44）年 3 月、重要文化財に指定されている。
（煉瓦造、建築面積 884. 1 平方メートル、二階建、一部地下一階、スレート葺、両翼塔屋付。袖塀付属附旧金庫、1 棟 石造、建築面積 181. 0 平方メートル、一階建）

1986（昭和 61）年 4 月、文化財指定物件の永久的保存を願った当協会は、この建物を京都府に移管し、1988（昭和 63）年 10 月からは京都府京都文化博物館別館として活用され、その一部で当協会は業務を行うこととなった。

このあたりは、『六角堂縁起』によると、1200 年あまり前、愛宕郡折田郷土車里（おたぎぐんくしだのごうつちぐるまのさと）と呼ばれていたと言う。これにちなみ、古代学協会だよりは『土車』とした。この地名は桓武天皇の平安遷都以来なくなってしまい、平安時代は、左京三条四坊四町にあたる。後期には後白河天皇の皇子・以仁王や皇女・式子内親王の邸宅、高倉宮となった。



施設平面図（京都文化博物館別館）

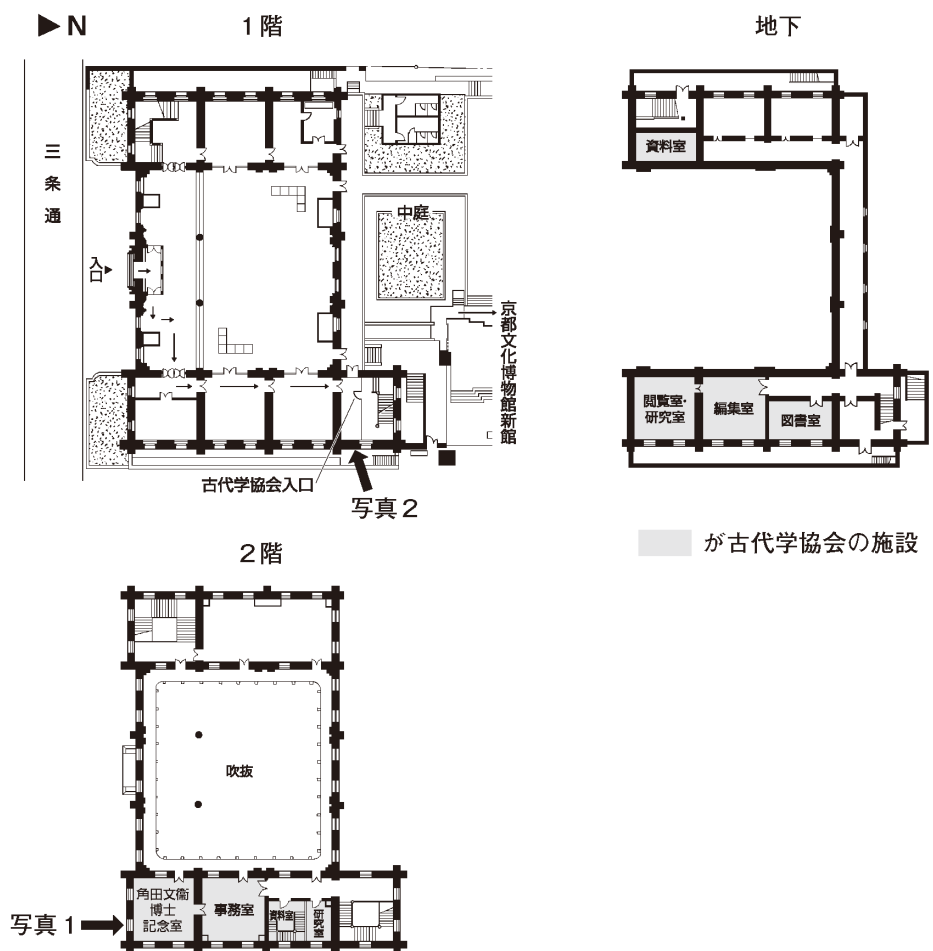


写真1 角田文衛博士記念室・古代学講座講義室



写真2 入口から上：事務室へ 下：地下研究室へ

Ⅲ 令和 6（2024）年度事業概要

1. 理事会・評議員会

(1) 理事会の開催

1) 令和 6 年度第 1 回定例理事会（令和 6 年 5 月 26 日）

〔主な議決事項〕

- ・ 令和 5 年度事業報告（案）
- ・ 令和 5 年度決算報告（案）
- ・ 令和 6 年度修正事業計画（案）
- ・ 死去に伴う評議員候補者（案）

2) 令和 6 年度第 1 回臨時理事会

開催方法：議決の省略の方法

議決されたとみなされた日：令和 6 年 10 月 8 日

〔主な議決事項〕

- ・ 令和 6 年度修正事業計画（案）
- ・ 令和 6 年度修正収支予算（案）

3) 令和 6 年度第 2 回定例理事会（令和 7 年 2 月 21 日）

〔主な議決事項〕

- ・ 令和 7 年度事業計画（案）
- ・ 令和 7 年度収支予算（案）

(2) 評議員会の開催

1) 令和 5 年度定時評議員会（令和 6 年 6 月 14 日）

〔主な議決事項〕

- ・ 令和 5 年度決算報告（案）
- ・ 死去に伴う評議員候補選任（案）

2. 決 算

貸借対照表の要旨
(令和7年3月31日現在) (単位：千円)

資産の部		負債及び正味財産の部	
流動資産	13,501	流動負債	3,739
固定資産	361,876	固定負債	
基本財産	1,200	負債合計	3,739
特定資産	270,325	指定正味財産	63,539
その他固定資産	90,350	(基本財産充当額)	1,200
		(特定資産充当額)	62,339
		一般正味財産	308,099
		(基本財産充当額)	
		(特定資産充当額)	307,986
		正味財産合計	371,638
合 計	375,377	合 計	375,377

正味財産増減計算書の要旨

自 令和6年4月 1日
至 令和7年3月31日

(単位：千円)	
科 目	金 額
経常収益	27,021
経常費用	39,205
(うち事業費)	37,037
(うち管理費)	2,168
経常外収益	0
経常外費用	6,793
法人税、住民税及び事業税	0
当期一般正味財産増減額	△ 18,977
当期指定正味財産増減額	△12,000

3. 角田文衛博士顕彰事業

(1) 「角田文衛古代学奨励賞」

〔賞の趣旨〕

平成 22 年に当協会が創立 60 周年の年を迎えたことを記念し、当協会の創立者・故角田文衛博士の名を冠した角田文衛古代学奨励賞を創設。

本賞は、季刊『古代文化』への投稿原稿の中から秀作を選んで表彰し、古代史研究の奨励と若手研究者の支援を意図するものである。令和 2（2020）年度より隔年の選考としたため、令和 6 年度の選考は行わなかった。

〔角田文衛古代学奨励賞歴代受賞者〕

◆第 1 回（2011 年 10 月）

東村純子氏（日本学術振興会特別研究員〔国立民族学博物館〕）

「輪状式原始機の研究」（第 60 巻第 1 号、2008 年 6 月）

土口史記氏（日本学術振興会特別研究員〔京都大学人文科学研究所〕）

「先秦期における「郡」の形成とその契機」（第 61 巻第 4 号、2010 年 3 月）

◆第 2 回（2012 年 10 月）

樋口健太郎氏（大手前大学非常勤講師）

「藤氏長者宣下の再検討」（第 63 巻第 3 号、2011 年 12 月）

◆第 3 回（2013 年 10 月）

中村耕作氏（國學院大學文学部助手）

「土器カテゴリー認識の形成・定義—縄文時代前期後半における浅鉢の展開と儀礼行為—」（第 64 巻第 2 号、2012 年 9 月）

◆第 4 回（2014 年 10 月）

久米舞子氏（国際日本文化研究センター プロジェクト研究員）

「平安京『西京』の形成」（第 64 巻第 3 号、2012 年 12 月）

◆第 5 回（2015 年 10 月）

関根章義氏（仙台市教育委員会生涯学習部文化財課主事）

「古代陸奥国における陶硯の受容と展開—城柵官衙遺跡を中心として—」（第 66 巻第 3 号、2014 年 12 月）

◆第 6 回（2016 年 10 月）

藤山龍造氏（明治大学文学部准教授）

「砥石から読み解く骨角器生産—栃原岩陰遺跡を中心に—」（第 66 巻第 1 号、2014 年 6 月）

◆第 7 回（2017 年 10 月）

本庄総子氏（日本学術振興会特別研究員〔奈良女子大学〕）

「奈良時代の解由と交替訴訟」（第 68 巻第 2 号、2016 年 9 月）

◆第 8 回（2018 年 10 月）

家原圭太氏（京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課技師）

「平安京の邸地分布と園池」（第 68 巻第 3 号、2016 年 12 月）

◆第9回（2019年10月）

板垣優河氏（京都大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

「石器使用痕からみた打製石斧の機能－縄文時代生業の復元に向けて－」（第69巻第2号
2017年12月）

◆第10回（2021年10月）

鶴来航介氏（福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課）

「泥除の系列」（第71巻第4号、2020年3月）

◆第11回（2023年10月）

新尺雅弘氏（大阪府教育委員会）

「近江・石山国分瓦窯からみた藤原宮造瓦供給体制の特質－藤原宮造営における律令負担の
考古学的予察－」（第74巻第4号、2023年3月）

（所属は受賞時）

4. 研究事業

【古代学協会による個人・共同研究】

(1) 日本の後宮の研究

研究代表：山田邦和（古代学協会理事・同志社女子大学特任教授）

共同研究者：吉川真司（古代学協会参与・京都大学名誉教授）、岡島陽子（古代学協会プロジェクト研究員・京都橘大学講師）、櫻井 智（京都大学博士後期課程）

期間：5年（令和4年～令和8年）

〔研究の目的〕

当協会創始者である角田文衛博士（2008 没）が 1973 年に學燈社より刊行した『日本の後宮』は古代から近代までの後宮の通史であり後宮研究には欠かせないものであった。現在にいたるで他にはこのような書籍は刊行されていない。しかし当該書籍は大判で高価（出版当初 38,500 円）なものとなっており、出版社の學燈社もすでに倒産しているため手に入りにくい。そのような中、日本の後宮研究に資すべく『日本の後宮』の普及版を作成する。たんに普及版とするだけでなく、角田文衛博士の記述を検証し、適宜訂正を加え、補注や解題を加えての決定版とすることを目的とする。

〔令和 6 年度の研究概要〕

角田文衛著『日本の後宮』のテキストデータのチェック、角田先生加筆部分の検討、女官表の校訂作業、構成の再検討。令和 8 年度刊行書店の選定（思文閣出版）刊行スケジュールの決定。岡島氏は本務において 1 年間の産休を取得されたため、同期間プロジェクト研究員も休まれた。

(2) 紫式部研究

研究代表：山田邦和（古代学協会理事）、臈谷壽（古代学協会理事長）

共同研究者：山本淳子（京都先端科学大学教授）、中田 昭（写真家）、日山正紀（京都新聞社）

〔研究の目的〕

令和 6 年 1 月から始まった NHK 大河ドラマは紫式部を主人公とし、『源氏物語』もクローズアップされた。協会は重要文化財の『源氏物語 大島本』を所蔵しており、『紫式部日記』（断簡）も 2 点所蔵している。この『源氏物語』紫式部ブームを好機として、平安王朝研究の第一人者である臈谷理事長が中心となり、歴史学、考古学の観点から紫式部の人生を史実からたどり、美しい写真を多用した「見る本」の要素も加えた書籍を刊行した。出版記念講演会も開催し、普及啓発活動を推進する。

〔令和 6 年度のおもな研究成果等〕

- ・『史実でたどる紫式部―「源氏物語」は、こうして生まれた。』 刊行
- ・2024 年度第 1 回公開講演会（共催：京都府立京都学・歴史館）

テーマ：紫式部と源氏物語 『史実でたどる紫式部―「源氏物語」は、こうして生まれた。』

出版記念

- ・連続講座 「紫式部の生きた王朝社会」全 7 回
- ・写真展 写真家 中田昭 紫式部と『源氏物語』の世界
同企画トークセッション

(3) 平安京研究の再構築

研究代表：山田邦和（古代学協会理事・同志社女子大学特任教授）

共同研究者：吉川真司（古代学協会参与・京都大学名誉教授）

園田優人（京都大学大学院）

期間：4年（令和6年～令和9年）

〔研究の目的〕

古代学協会が編集した『平安京提要』の刊行からまもなく30年の歳月がたつ。その間の平安京研究の進捗は著しく、今後の新たな研究の指針となるような研究成果が必要とされている。このような要請に応えるため、「平安京の住所録」を作成する。これまで蓄積されている資料をデータ化し、最終的には研究報告書として刊行し、データベースを公開する。

また、研究成果の普及啓発活動として、平安京関連重要史跡に顕彰碑・説明板を設置する。

〔令和6年度の研究概要〕

加納重文先生私家版本『平安京住所録』、『平安京提要』テキストデータ化ほぼ終了。

(4) 陵墓研究

担当：山田邦和（古代学協会理事）、森岡秀人（古代学協会客員研究員）

陵墓関係17学協会の一員としての活動

〔令和6年度の活動概要〕

- ・後二條天皇陵外構柵その他整備工事見学 2024年10月24日
- ・大山（大仙・大仙陵）古墳の限定公開 2024年11月29日
- ・市野山古墳（允恭天皇陵）飛地い号の外構柵改修その他工事見学 2025年1月30日（木）
- ・狐井塚古墳（陵西陵墓参考地）飛地ろ号ほか外構柵改修工事見学 2025年2月19日（水）
- ・大山古墳（仁徳天皇陵）立入観察 2025年3月7日
- ・百舌鳥陵山古墳（現履中天皇陵）事前調査の見学 日時：2025年3月13日

(5) 中国古代の東北フロンティア開発と楽浪郡

担当：田中俊明（滋賀県立大学名誉教授・古代学協会客員研究員）

期間：令和6～8年度（3年間）

共同研究者：谷 豊信（東京国立博物館客員研究員）

徐 光輝（龍谷大学国際学部教授）

井上直樹（京都府立大学文学部教授）

〔研究の目的〕

本研究の目的は、楽浪郡を総体として把握することであり、現地調査とそれに加えて楽浪郡に直接関わる遺物（楽浪埴・楽浪土器・封泥など）の調査を重ね、文献の整理と合わせて討議して結論を出していく。文献の蒐集検討を進め、また戦前の日本人による調査の際の出土・採集遺物を、韓国の国立中央博物館・ソウル大学校博物館、日本の東京国立博物館などが所蔵するものが多く、その調査を実施する。

〔令和6年度の研究概要〕

田中・井上・谷の3人が8月31日から4泊5日で韓国の中央博物館とソウル大学校博物館で調査した。9月1日(日)は中央博物館の展示を参観し、2日に中央博物館所蔵の楽浪封泥を50点、精密観察・記録・写真撮影を実施した。3日にソウル大学校博物館の所蔵品の調査をした。また中央博物館の金在弘館長やソウル大学校博物館長権五榮館長らと面談・会食し、旧交を温め、調査についての打ち合わせをした。

〔令和6年度のおもな研究成果等〕

〈論文等〉

田中俊明「観峰館所蔵朝鮮古碑拓本解説(三)」観峰館紀要19号

〈研究発表〉

田中俊明「加耶の滅亡」(第1回小加耶学術大会「加耶古墳群学際間研究課題」、三江文化財研究院、)



中央博物館にて



中央博物館調査封泥
「楽浪大尹章」

(6) 弥生時代像の変質と時空間区分原論

研究代表：森岡秀人(古代学協会客員研究員)

期間：令和6～8年度(3年間)

〔研究の目的と姿勢〕

私の研究は、弥生時代の年代論を大幅に是正した1980年代中頃より、正しい年代観に基づき、弥生時代の本来の歴史像はどう結ぶのが妥当かというマクロ的な視点からの終局の課題に向けて、さまざまな分野のミクロ的思考を進め、「モノ」(遺物)と「場」(遺跡・遺構)に対し、実際どう向き合うかの努力を続けてきた。可能な限り現地を踏み、常に新出する現物を手に取り観察眼を鍛え、遺跡の実態を多様な集落モデル論に置き換え、その構造と隣接社会の動きをとらまえる視点が不可欠と考えてきた。新出資料に関しても、行論に取り込みつつ、歴史的位相に関心を寄せている。近畿、西日本、列島社会の動態との比較、遺物の正確な分布と用途、それらが動く太い主要回路と細いルート of 網目、陸海交通網の実証的な研究を重んじてきた。弥生時代の問題を広く日本史的大所から俯瞰するため、時代の狭隘な枠組みや関連分野にとらわれず、時代区分を超えた他分野の方法論も学びとり、活かせる対象には多くの注意を払った。

以上の動静を直視し、さらに研究姿勢を踏まえ、持続させ、これまでの諸研究の接続と有機的関係性の先に見えてくる弥生社会の実態について、日本史や東ユーラシア世界における立ち位置を少しでも理詰め構築する基盤的な調査・研究活動をおこなってきた。従来の研究で柱にしてきたことや問題軸に据えたことは数多く、領野としても広い範囲に及んでいる。例示すると、年代軸としての実年代研究、弥生土器編年研究を基盤に据えた交差編年研究、沖積地の初期農耕集落や高所に進出した高地性集落の実態研究、集落構造や集落間の集団関係モデル論、共同体論の再構築、生産の場としての小区画水田跡の研究、集落や地域社会の統率者と従来の首長制・首長論の比較研究、搬入品・物資流通の社会システムの研究、折衷型式の掌握、青銅器・鉄器論と社会構成史との関係性、銅鐸の観察・編年と銅鐸群やその埋納様相の段階的研究(多段階埋納)、淡路島の重文銅鐸の諸問題の解明、中国正史の倭・倭国叙述との対比研究、縄文時代後・晩期社

会比较研究や古墳出現期社会・古式土師器研究など時代区分論、時期区分論、移行期問題を射程とした前後・周辺部門研究を進めることができた。また、140年にわたる弥生時代研究史とその画期論にも継続的に取り組み、時空間での存在が危ぶまれるようになったコア部分の弥生文化を再考する仕事も進める予定である。

以上に掲げた雑駁な総花的な諸研究を相互の連関を取りつつ引き締め作業を随時行い、鋭意一定の結論を目指した総合的研究を利活用しつつ弥生社会像の新構築を果たし、日本史研究や古代学の研究の一角に寄与する終盤的な包括・統合研究の推進を唯一の目的とする。

〔令和6年度の研究概要〕

4月、大和川水系、支流の石川流域を踏査し、南河内の高地性集落、段丘上弥生集落遺跡の踏査を行い、水域としての集落間関係を体感的に調べた。大阪府茨木市郡・倍賀遺跡の発掘調査現場を終了段階に至るまで、10数回踏査し、農耕集落モデルに大きな変更を迫る遺跡居住域の濃密な発掘調査内容について、現地担当者と意見交換、助言しつつ実見した。とくに新たに検出された木棺墓の墓域構成に関心を寄せ、着装品や副葬品の様相に基づき、被葬者像を考えた。墓域と居住域との配備は、大和・摂津・播磨・近江などの遺跡で変則的なものが増加しており、弥生集落モデル論の構築には、今後かなりの修正が必須であることが判明した。発掘調査現地の視察は各地におよび、遺跡・遺物に対する観察考証では、奈良県布留遺跡、兵庫県神戸市住吉宮町遺跡、玉津田中遺跡、二之宮遺跡、扁保曾塚古墳、尼崎市池田山古墳、明石市東野町遺跡、垂水日向遺跡、淡路市舟木遺跡、南あわじ市入田稻荷前遺跡、木戸原遺跡、戒壇寺遺跡、三木市愛宕山古墳、赤穂市高取山古墳、放亀山古墳、大阪府和泉市池上曾根遺跡、柏原市大泉遺跡、東大阪市小若江北遺跡、大東市飯盛山遺跡、富田林市中野遺跡、大坂城下町遺跡、滋賀県守山市伊勢遺跡、栗東市野尻・下鈿遺跡、中沢遺跡、彦根市稲部遺跡、奈良県観音寺・本馬遺跡、纏向遺跡、京都府松田墳墓群、松田古墳群、小中田遺跡、亀岡市千代川遺跡、徳島県海部郡海陽町芝遺跡、吹田市域港津関連遺跡、淡路の重文3銅鐸、氷上市新出の銅鏡調査を行った。島根県の山神谷遺跡ほか古墳・墳墓の踏査を松本岩雄氏の案内で行い、奥出雲における環濠施設を持つ特殊な遺跡の実態を調べた。

土器研究会や関連学会では、金沢市で開催された東日本古墳確立期土器研究会に出席し、最新の様相把握に努めた。奈良県田原本町十六面・薬王寺遺跡、坂田寺下層遺跡、生駒西麓中・南河内地域の土器・石器検討などに参加した。弥生中期土器併行関係研究会は連続的に土器観察のため、愛知県・島根県に赴き（阿弥陀寺遺跡・一色青海遺跡、出雲の森博物館、島根県埋蔵文化財センターなど）、現物の観察に努め、各地のオンライン発表を視聴した。関西縄文文化研究会にも出席し、再整理作業資料の実見に努めた（京都・高砂）。年代問題では、池上曾根遺跡年輪年代再考問題の整理を独自に行った。土器絵画の兵庫県下資料を深井・大川両氏と集成し、地域性や諸特徴をまとめた。守山市伊勢遺跡の40年近い調査成果を大橋・伴野両氏と1年がかりで総括することができた。愛知県豊橋市美術博物館では三遠式銅鐸の特別展展示品調査を実施した。高所立地集落の眺望観察は継続しており、宇佐美智之氏と兵庫県播磨町大中遺跡、明石市東野町



山神谷遺跡からの遠景



島根県土器検討会
(於：島根県埋蔵文化財センター)

遺跡、大阪府交野市域の高地性遺跡、森古墳群などを共同調査した。さらに弥生後期社会像の検討に関する総括的論文と取り組んだ。なお、地方史研究協議会・神戸史学会では兵庫県ของ考古学の特性を究める作業を行なうとともに、普及にも努めた。

今年度は、加えて『総説・弥生時代高地性集落論』の構成。企画と執筆者・論題など目次と編集方針を固め、雄山閣から出版予定で、その作業も第2期科研の総まとめとしてスタートさせた。

〈論文・研究ノート等〉

森岡秀人「近江・伊勢遺跡の史跡公園ついにオープン—邪馬台国論争新たな発火点、検証の場—」

(『邪馬台国新聞 全国邪馬台国連絡協議会会報』第17号、全国邪馬台国連絡協議会)

戸塚洋輔・森岡秀人ほか「滋賀県彦根市稲部遺跡出土の3世紀の鞍」『日本考古学協会第90

回総会研究発表要旨』日本考古学協会、千葉大学にて

森岡秀人「謎の伊勢遺跡と倭国の形成 中」(『湖国と文化』189号夏)

森岡秀人「ヤマト王権論をめぐる布留遺跡の位相と前社会」(『布留遺跡の考古学—物部氏の隆盛の地—』、六一書房)

森岡秀人・宇佐美智之「和泉の『高地性集落』の基礎的分析—眺望をめぐる惣ヶ池遺跡の成立意義や母集団議論を要として—」(『和泉市史紀要』第34集、和泉市教育委員会)

森岡秀人「淡路・松帆銅鐸周辺の重文三銅鐸をめぐる諸問題の再整理」(『斗酒百篇：弥生時代探求 石川日出志教授定年退職記念論集』、同刊行会)

森岡秀人「考古学からみた兵庫県の地域研究とその特性」(『歴史と神戸』第63巻第5号、神戸史学会)

森岡秀人「近世城郭の石切場・石材調達と比較考古学—徳川大坂城東六甲石切場の調査・研究から—」(『コル』第17号、古代山城研究会)

森岡秀人・深井明比古・大川康裕「兵庫県における弥生時代後・終末期の絵画・記号土器集成と意義」(『兵庫県立考古博物館紀要第18号 和田名誉館長喜寿記念』)

森岡秀人「コラム 土器と銅鏡—縄れ合い、鬘れ合いのお話—」(『古墳出現期土器研究』第11号、古墳出現期土器研究会)

森岡秀人・戸塚洋輔・東村純子「桜井市纏向遺跡辻地区土坑10出土筒状繊維製品の再検討—近江・稲部遺跡の集落出土武具との比較研究—」(『奈良県立橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第48冊)

森岡秀人「発見された海浜部の縄文遺跡と大震災の復興」(『立命館大学考古学研究報告2号』矢野健一先生退任記念論集)

森岡秀人「近畿地方における集落出土鞍出現の社会的背景」(『彦根市文化財調査報告書第97集』、彦根市)

森岡秀人「弥生時代後期の近畿の南部と北部—時空間をめぐる確執の淵源—」(『弥生後期社会の実像』、古代学研究会)

森岡秀人「付編 扁保曾塚古墳後円部の葺石・基底石及びその給源に関する考察」(『扁保曾塚古墳第4次発掘調査報告書』、神戸市スポーツ局文化財課)

森岡秀人「付論 最初期防波堤の石垣様式・矢穴型式・遺構年代と神戸海軍操練所の時代」(『神戸海軍操練所跡第1次発掘調査報告書』、神戸市)

森岡秀人「日宋貿易期の中国製黄緑釉褐彩花文陶器盤の一例とその周辺」(『考古学論叢Ⅳ』関西
大学文学部考古学研究室)

森岡秀人・宇佐美智之「明石市東野町高地性遺跡の眺望分析と明石海峡をめぐる弥生後期社会の
緊迫動向」(『明石市史 紀要』第7号、明石市史編纂委員会)

森岡秀人「在野の考古学者原田大六さんへの郷愁」(『土車』151号、(公財)古代学協会)

森岡秀人「弥生時代中期後半の自然科学的実年代はいったいどうなったのか—大阪府池上曾根遺
跡の大型建物使用木柱の年輪年代再測定をめぐる学界の緊急動向—」(『古代文化』第76巻第2号、
(公財)古代学協会)

森岡秀人「考古学研究から見た兵庫県の特性および展望」(『地方史研究』433号、地方史研究
協議会)

森岡秀人『播磨から弥生社会を問いなおす』(第23回播磨考古学研究集会記録集発言録、播磨
考古学研究集会)

〈講演〉

森岡秀人「弥生社会の男女のシャーマン—絵画の考古学が究める—」(アスニー山科講演会、京都)

森岡秀人「考古学研究からみた兵庫県—その特性の二、三について—」(地方史研究協議会兵庫
大会関連例会講演会、姫路)

森岡秀人「考古学と発見・発掘 高松塚古墳」(西宮ロータリークラブ講演・歴史、西宮)

森岡秀人「伊勢遺跡と弥生後期年代論のいま」(伊勢遺跡史跡公園一周年記念シンポジウム、守山)

森岡秀人・宇佐美智之「明石海峡をめぐる眺望比較」(第2回歴史講座シンポジウム 播磨町郷
土資料館 会場：兵庫県立考古博物館)

森岡秀人「大発見でつづる芦屋の遺跡」(芦屋市の文化財再発見関連講座、芦屋市立美術博物館)

森岡秀人「考古学研究からみた兵庫県—その特性の二、三について」(地方史研究協議会 兵庫
大会関連例会報告 兵庫県立歴史博物館 講演会)

森岡秀人「近畿〜覇権をめぐる南部と北部」(第25期むきばんだやよい塾、米子)

森岡秀人「近年の考古学発掘大成果総まくり」(関学K G 考古歴史の会、梅田)

森岡秀人「2024年の日本考古学界の回顧と展望」(豊中歴史同好会講演、豊中)

※毎月定例の古代学講座、朝日カルチャーセンター講座については、すべてを割愛した。

〈書籍〉

森岡秀人・大橋信弥・伴野幸一『伊勢遺跡と卑弥呼の共立』吉川弘文館

【研究事業による出版】

(1) 古代学協会監修『史実でたどる紫式部』

—「源氏物語」は、こうして生まれた。—

著者：山本淳子(京都先端科学大学教授・古代学協会顧問)

臈谷 壽(同志社女子大学名誉教授・古代学協会理事長)

山田邦和(同志社女子大学特任教授・古代学協会理事)

日山正紀(京都新聞社)

写真：中田昭



発行：光村推古書院

A5 判、上製本、304 頁、令和 6 年 8 月 14 日刊、価格 3960 円（税込）

臈谷理事長の構想の下、史実を押さえながらも、初学の人にもわかりやすく、見た目に美しい、本を目指した。

(2) 研究報告第 18 輯『平安宮豊楽院跡の調査 京都市中京区聚楽廻中町 聖三一教会第 2 次発掘調査』

編著：植山茂（元平安博物館助手、元京都府京都文化博物館主任学芸員）・村野正景（静岡大学准教授、元京都府京都文化学芸員）

発行：公益財団法人古代学協会・京都府京都文化博物館

本文 99 頁、カラー図版 35 頁、2025 年 3 月刊

古代学協会の機関であった平安博物館・平安京調査部が行った豊楽院跡調査の 6 回の調査の内、昭和 52 年（1977）に京都市中京区、聖三一教会の境内で実施した発掘調査の正式調査報告書。本調査で出土した平安時代前期から後期初め頃におよぶ瓦資料を中心とした。



【科学研究費助成事業による研究】

(1) 課題名：初等・中等教育における考古学的活動に関する基礎的研究：学校考古学史の構築に向けて

（令和 3 年度～令和 6 年度、基盤研究（C）、課題番号：21K00979）

研究代表者：平田 健（古代学協会客員研究員）

〔研究の目的〕

1900 年代から現在に至る初等・中等教育（主に中学校及び高等学校）における考古学的活動を（1）ヒト（生徒、教師、研究者）、（2）コト（授業、クラブ活動）、（3）モノ（学校教材）の 3 つの視点で再評価し、日本考古学史に位置付けることを目的とする。

その対象地域は日本国内とするが、旧植民地における学校教育も視野に入れ、これまで調査・研究を行ってきた台湾をフィールドに含める。平成 30 年（2018）7 月の学習指導要領改訂や、高等教育での考古学専攻への進学推進など、初等・中等教育の中で考古学的活動が展開される機会が近年多くなっている。こうした活動の歴史とその背景を明らかにし、複眼的に評価を行うことで、学校考古学史という新たな研究領域を創造する。

〔令和 6 年度の研究概要〕

令和 6 年度の研究成果は以下のとおりである。①昭和 23 年（1948）に福島県立磐城高等学校史学部が、後藤守一指導のもと発掘調査した神谷作 101 号墳では、天冠をつけた男子埴輪（重要文化財）等が出土した。出土埴輪を修復したのが、文化財保護委員会技官であった松原正業であったことを、特別展『はにわ』で紹介。文化財修復者と生徒・教師という、新たな関係性が明らかになった。②クラブ活動等で行われた発掘調査について、香川県、長野県等の文献調査を実施。昭和 2 年（1927）から平成 25 年まで 1671 件の調査遺跡（時代、種別）、調査主体者、目的及び参考文献のデータベースが完成した。③井上式地理歴史模型標本について、製作・販売者の井上清助自筆稿本『博多人形井上清助奮闘五十年史』を調査。坪井正五郎らの書簡から修正指示など監修の過程を明らかにすることができた。長崎大学、愛媛大学、東京大学総合研究博物館では

『日本種族祖先遺物標本』と『日本種族石器時代人民遺物標本』を調査。茨城県陸平貝塚出土土器と模型標本の比較により、復元精度の高さを確認した。

台湾では、國立臺南第一高級中學と長榮高級中學の学校内博物館を調査。館の運営方法や教材の活用方法を担当者からヒアリング。國立臺灣歷史博物館では、新収蔵の人種模型標本を調査。同時に開催した博多人形研究交流会では、臺灣的井上式地理歴史模型標本之製作與運用：平田健、日本的學校教育資料之保存實例：村野正景氏、談臺博館藏人偶人像類型來源、歷史與意義：李子寧氏、本館新入蔵井上式地理歴史模型標本之介紹：呂怡屏氏による4本の講演を行い、関係者とこれまでの研究成果を共有、調査・研究の継続を再確認した。

〈論文〉

平田健「考古学・人類学研究における絵葉書の活用ー多様なメディアとしての考古学絵葉書ー」『文

化財写真研究』14、文化財写真技術研究会

〈講演〉

平田健「考古学・人類学研究における絵葉書の活用ー多様なメディアとしての考古学絵葉書ー」

第14回文化財写真技術研究会（招待講演）

平田健「明治から大正期における考古学・人類学の普及活動ー坪井正五郎から鳥居龍蔵へー」特別企画展「鳥居龍蔵と城山貝塚」記念講演会（招待講演）

〈図書〉

河野正訓、河野一隆、菊池望、品川欣也、山本亮、小澤佳憲、岸本圭、白井克也、田辺龍太、土屋隆史、日高慎、平田健『特別展 はにわ』東京国立博物館



「博多人形研究交流会」終了後
（於：國立臺灣歷史博物館）



『日本種族祖先遺物標本』
井上式地理歴史模型標本作所
長崎大学経済学部所蔵

（2）課題名：『色葉字類抄』の語彙研究および総合データベースの構築

基盤研究 (B)21H00529 (2021-2023)・23K2065 (2024-2024)

研究代表：藤本 灯

分担研究者：中野 直樹（常葉大学短期大学部、日本語日本文学科）

劉 冠偉（京都大学、人文科学研究所）

本庄 総子（京都大学、文学研究科）

李 媛（京都大学、人文科学研究所）

小林 雄一（京都先端科学大学、全学共通教育機構）

大島 英之（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、研究系）

久保 亜子（総合研究大学院大学、先端学術院）

研究協力者：申 雄哲（国立ハンバツ大学（韓国）、人文社会大学日本語科）

〔研究の目的〕

本研究は、本邦の国語辞書の祖である『色葉字類抄』を軸とした古辞書の研究である。『色葉字類抄』を日本の語彙史・辞書史に位置づけるとともに、『色葉字類抄』を起点とした国語辞書

史の歴史を明らかにすることを目的とする。また、『色葉字類抄』の語句に対する注釈書の作成開始し、異本および他の古辞書を対象としたデータベースの構築をおこなう。

〔令和6年度の研究概要〕

2024年度は研究4年目にあたる。データベース構築については、データ入力を進めるとともに、『辞書語彙データベース』(<https://jisho-go.kojisho.com/>)としての運用を推進した。具体的には、2025年2月に『本草和名』の全文テキストデータ・和名索引と『古活字版和名類聚抄』の和名索引を公開した。また3月に『増続大広益会玉篇大全』の巻6～11を検索システム上で追加(2024年10月に巻2～5を公開)、全文公開するとともに、『文明本節用集』のチリヌルヲ部を検索システム上で追加公開した。2024年9月19、20日には北京・清華大学で、シンポジウム『字典・詞典の研究―回顧と展望―』を開催し、日中韓の20名の研究者が講演および研究発表を行った(清華大学外文系主催、日本漢字学会、公益財団法人日本漢字能力検定協会協賛)。本シンポジウムの内容は科研費・研究成果公開促進費の助成を得て、2026年に出版されることが決定した。研究代表者の藤本の公表された成果としては、口頭発表『「色葉字類抄」語彙注釈の方法』(「韓国日本研究総連合會」第12回国際學術大會、2024年4月20日)、「日本の“国語辞書”の語彙の消長―『色葉字類抄』口篇壹字部の熟語を母体として―」(上記シンポジウム、9月19日)、論文「本草和名と古活字版和名類聚抄の全文テキストデータ(附：和名索引)」(劉冠偉・武倩・申雄哲・韓一・藤本灯、『デジタル・ヒューマニティーズ』4(1)、pp.53-57、2025年2月28日)がある。なお最終年度前年度応募の科研費が採択されたため、最終年度の1年前に本事業は廃止となり、便宜上、最終年度となっている。

〈論文〉

劉冠偉・武倩・申雄哲・韓一・藤本灯「本草和名と古活字版和名類聚抄の全文テキストデータ(附：和名索引)」(『デジタル・ヒューマニティーズ』4(1))

劉冠偉「HDIC Viewerの再開発：日本古辞書ポータルサイトの構築に向けて」(『じんもんこん 2024 論文集』2024)

Guanwei Liu, Satoru Nakamura, Taizo Yamada「Development of hi-text: an Attempt at Stable Encoded Character Shape and Unregistered Glyph Data Exchange in Transcribed Text Dataset」(『Proceedings of JADH2024』2024)

小林雄一「日本の古辞書研究(古辞書研究最前線)」(『学会通信 漢字之窗』6(2))

申雄哲「『日葡辞書』所収仏教語彙について―「仏法語」を中心に―」(『日語日文學研究』129)

呉美寧・申雄哲「日本語學習者對象の漢文訓讀教育―崇實大學校日語日文學科〈日本語文獻講讀〉を例に―」(『日本語教育』110)

〈講演〉

藤本灯『「色葉字類抄」語彙注釈の方法』(「韓国日本研究総連合會」第12回国際學術大會(国際学会))

藤本灯「日本の“国語辞書”の語彙の消長―『色葉字類抄』口篇壹字部の熟語を母体として―」(シンポジウム「字典・詞典の研究―回顧と展望―」(国際学会))

中野直樹・劉冠偉「『増続大広益会玉篇大全』本文の典拠について―『大広益会玉篇』『字彙』『正字通』等の利用―」(シンポジウム「字典・詞典の研究―回顧と展望―」(国際学会))

中野直樹「近世琉球で使用された字書についての一報告」(シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」(国際学会))

劉冠偉「古辞書 Web 研究資源横断検索のためのメタデータ設計」(シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」(国際学会))

劉冠偉「日本古代辞書研究中的数字人文学応用」(区域国別学青年沙竜(国際学会))

劉冠偉「日本古代辞書データベース：建設入門」(2024 年“漢字漢語与域外文献”研究生国際夏令营(国際学会))

Guanwei Liu, Satoru Nakamura, Taizo Yamada「Development of hi-text: an Attempt at Stable

Encoded Character Shape and Unregistered Glyph Data Exchange in Transcribed Text

Dataset」(The 13th Conference of Japanese Association for Digital Humanities)(招待講演)(国際学会))

劉冠偉「漢字研究資源構築における漢字情報記述：国際的な漢字研究のための情報共有基盤の構

築」(東アジア漢文古典研究の諸相(国際学会))

劉冠偉「漢字字形データベース GlyphWiki によって漢字構造情報を生成する試み」(東洋学へのコンピュータ利用 第 38 回研究セミナー)

金愚政・崔至延・申雄哲「デジタル技術を活用した漢文古典研究」(International Workshop on Digital Humanities "Digital Kanbun/Hanmun Studies: The Forefront of the Methods"(国際学会))

本庄総子「東アジアの疫病史料」(読史会(国際学会))

本庄総子「日本古代社会「閉鎖性」論」(「古代の東アジアと日本史研究」学術シンポジウム(国際学会))

李媛「日本古辞書の構造化記述について：『篆隸万象名義』を例に」(シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」(国際学会))

小林雄一「『名語記』と悉曇学」(シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」(国際学会))

小林雄一「高野山金剛三昧院蔵享徳三年寄進状に見える「類聚名義鈔」とその注記について」(訓点語学会第 130 回研究発表会)

大島英之「『色葉字類抄』における呉音漢音混読語の性格」(シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」(国際学会))

申雄哲「TEI と RDF を活用した日本古辞書の出典情報の構造化」(シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」(国際学会))

申雄哲「漢文訓読研究会のテキストデータ活用の新展開：人間可読データから機械可読データへ」(漢文訓読研究会—東アジア文獻研究の回顧と展望(国際学会))

申雄哲「日本語学習者に対する漢文訓読教育の意義について」(韓国日本語教育學會 第 67 回 國際學術發表大會)



国際学会 字典・詞典の研究

大島英之「DHSJR における漢字字体の正規化の試み」（「資料横断的な漢字音・漢語音データベース (DHSJR)」を用いた研究成果報告会）

加藤大鶴・石山裕慈・坂水貴司・高田智和・大島英之「資料横断的な漢字音・漢語音データベースの公開と活用可能性—2024 年度版の改訂に伴って—」（日本語学会 2024 年度春季大会（招待講演））

〈国際研究集会〉

シンポジウム「字典・詞典の研究—回顧と展望—」

〈共同研究機関〉

国立ハンバツ大学（韓国）・清華大学（中国）

（3）課題名：仁和寺文書調査資料のデータベース構築

（令和 6 年度～令和 8 年度、基盤研究（C）、課題番号 24K04219）

研究代表：古藤真平

〔研究の目的〕

令和 6 年度から 3 箇年計画の科学研究費助成事業研究として、古代学協会が平成 6～17（1994～2005）年度に行った仁和寺文書調査の研究成果について、それを学界・一般に公開できるよう、データベース化することを目的としている。

具体的には、調査した文書全点に関する所見を表組形式で提示する文字情報版データベースと、古代学協会版『仁和寺研究』第 1～5 輯（1999～2005 年）で研究成果発表に用いられた文書の画像を中心とする画像版データベースを制作することにより、調査所見の全容と研究誌で学術発表した内容との関係性を公開し、学界・一般からの検証にえられるものとするを期している。

古代学協会が調査対象とした文書函は 62 箱分で、黒塗手箱・御経蔵・塔中蔵・書籍の文書函総数の約 10 パーセント程度に過ぎない。しかし、『仁和寺研究』で発表した、第三世門跡覚行法親王ほか歴代門跡、高僧達が授け、授けられた伝法灌頂の記録、事相書『三僧記類聚』、仁和寺本『系図』、寛永復興金堂諸尊像の造像、仁和寺本『法成寺殿日記』（『御堂関白記』）、伽藍・院家に関して発表された研究論文に関する資料（撮影写真の画像を含む）を提示することには、一定の意味があり、関連分野に関心を持つ研究者に便宜を与えるものとなると考える。

〔令和 6 年度の研究概要〕

古代学協会が平成時代に行った仁和寺文書調査で調査対象とした黒塗手箱 12 箱分・御経蔵 18 箱分所収の全文書について、調書に記載したモノとしての所見（形状、法量、作成または書写年代などの観察・計測記録）と各文書の記載内容に関する所見（調査後に文献研究で確認した事項も含む）をエクセルシートに記入することと、古代学協会版『仁和寺研究』で研究成果発表に用いられた文書の写真データを整備することを期した。エクセルシート記入については、文書のモノとしての所見記入は全点の入力を完了できたが、文書の記載内容に関する所見記入は 10 分の 1 程度の入力にとどまり、以外は調書記載メモの転記または無記入にとどまった。写真データの整備は、もともと限定的な整備にとどめる計画だったとはいえ、進捗できなかった。令和 7 年度には、当初計画の作業に加えて、6 年度計画分の未達成部分、特に各文書の記載内容に関す

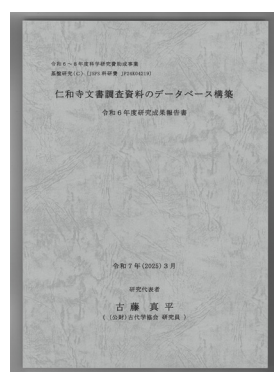
る所見の記入に注力する必要がある。

令和7年3月15日、古代学協会角田文衛博士記念室において、令和3～6年度の古代学協会での研究課題「仁和寺文書調査資料のデジタル化による平安時代史料の研究」の研究報告会を行うことに合わせて、以上に記した令和6年度の科研費研究の成果と、令和3～6年度の仁和伝法所研究員としての研究課題「仁和寺に関する史料の編年と古代学協会調査資料のデジタル化」の成果について報告した。当日は、『仁和寺文書調査資料のデータベース構築 令和6年度研究成果報告書』としてまとめた冊子を出席者に配布し、パワーポイントも用いて、古代学協会が平成時代に行った仁和寺文書調査の紹介、この度の科研費研究の目的と令和6年度中の研究成果・状況について報告した。配布した冊子には、エクセルシートに記入したデータを出力した「古代学協会による仁和寺文書調査の調査目録―黒塗手箱・御経蔵分―」と、総本山仁和寺 仁和伝法所編集・発行『仁和寺研究』第6輯で発表を予定していた「仁和寺編年史料（三）」の印刷所入稿データを収録した。

【研究成果】

〈史料集〉

古藤真平編「仁和寺編年史料（三）」（『仁和寺研究』第6輯、京都、総本山仁和寺 仁和伝法所、2025年3月）



5. 『古代文化』刊行事業

発行部数 950 部、会員数 699 (令和 7 年 3 月末時点)

正会員会費：9,400 円 初年度 7,400 円、院生・学生会費 4,700 円

(1) 編集委員会 (令和 6 年度)

編集委員 11 名、編集参与 40 名により毎月 ZOOM によるリモートで編集委員会を開催。会議では、投稿原稿の査読・講評、採否の決定、各号掲載論文の選定等を行い、第 76 巻 1 号～4 号までを刊行した。令和 6 年度の編集委員、編集参与は下記の通り。

◇ 編集委員

委員長：山田邦和 (同志社女子大学・(公財) 古代学協会副理事長：日本考古学)

主 任：横大路綾子 ((公財) 古代学協会)

古藤真平 ((公財) 古代学協会：日本古代史)

高橋克壽 (花園大学：日本考古学)

西野悠紀子 (女性史総合研究会：日本古代史)

毛利憲一 (平安女学院大学：日本古代史)

森岡秀人 (橿原考古学研究所共同研究員、(公財) 古代学協会客員研究員：日本考古学)

吉野秋二 (京都産業大学：日本古代史)

大野 薫 (立命館大学非常勤講師：日本考古学)

若井敏明 (佛教大学非常勤講師)：日本古代史)

野口 実 (京都女子大学名誉教授：日本古代・中世史)

鷹取祐司 (立命館大学：中国古代史)

◇ 編集参与

市大樹 (大阪大学)、伊藤雅文 ((公財) 石川県埋蔵文化財センター)、今津勝紀 (岡山大学)、大日方克己 (島根大学)、川尻秋生 (早稲田大学)、川添和暁 ((公財) 愛知県埋蔵文化財センター)、川本芳昭 (九州大学名誉教授)、栗原麻子 (大阪大学)、車崎正彦 (早稲田大学)、桑原久男 (天理大学)、桑山由文 (京都女子大学)、小林克 (元秋田県埋蔵文化財センター)、今正秀 (奈良教育大学)、斎野裕彦 (仙台市教育委員会)、佐々木達夫 (金沢大学名誉教授・(公財) 古代学協会理事)、佐々木恵介 (聖心女子大学)、鈴木一有 (浜松市教育委員会)、鈴木景二 (富山大学)、鈴木裕明 (奈良県立橿原考古学研究所)、角谷常子 (龍谷大学)、妹尾達夫 (中央大学)、関川尚功 (上牧町教育委員会)、田中俊明 (滋賀県立大学名誉教授・(公財) 古代学協会客員研究員)、辻秀人 (東北学院大学)、寺前直人 (駒沢大学)、中沢道彦 (長野県)、中砂明德 (京都大学)、中村大 (立命館グローバル・イノベーション研究機構)、中村豊 (徳島大学)、長村祥知 (富山大学)、永山修一 (ラ・サール学園)、南雲泰輔 (山口大学)、野島永 (広島大学)、長谷川修一 (立教大学)、濱田竜彦 (鳥取県地域づくり推進文化財局)、松木武彦 (国立歴史民俗博物館)、宮地聡一郎 (福岡県教育委員会)、宮本純二 (京都橘大学非常勤講師)、村上恭通 (愛媛大学)、村野正景 (静岡大学、(公財) 古代学協会客員研究員)、門田誠一 (佛教大学名誉教授)、柳澤一男 (宮崎大学)、山中章 (三重大学名誉教授、(公財) 古代学協会客員研究員)

◇ 事務担当：麻森敦子 ((公財) 古代学協会)

※所属はいずれも令和 6 年度末時点

(2)『古代文化』の刊行

第 76 巻第 1 号 (2024 年 6 月) 通巻 636 号

＜特輯 古代ギリシア史研究の現在地 (3) 王権と帝国＞

藤井 崇：特輯「古代ギリシア史研究の現在地 (3) 王権と帝国」に寄せて

三津間康幸：セレウコス朝とバビロニア文化

波部雄一郎：エジプト神官団決議布告から見たプトレマイオス朝とエジプト人神官団

ーヘレニズム王権と土着エリート層ー

長谷川岳男：ローマの東地中海進出とヘレニズム世界

藤井 崇：ギリシア人都市名望家をめぐる諸問題ーヘレニズム期からローマ帝政期へー

桑山由文：ローマ期のアテネー継承と変容ー

大野普希：ローマ支配下のポリスとポリス認識

＜研究ノート＞

木村光一：逆心葉形飾板に円環が垂下する飾金具について

＜史料紹介＞

岩本 崇：岡山県津山市田邑丸山 2 号墳出土の三角縁神獣鏡

＜研究展望・動向＞

佐藤亜聖：山田邦和著『変貌する中世都市京都 京都の中世史 7』を読む

＜学 史＞

古藤真平：2018 年平安博物館回顧展余録 その二

古代学協会が 1968 年までに収蔵した古文書・古典籍ー

＜註 釈＞

高橋照美：『小右記』註釈 (36) ー長和 4 年 6 月 20 ～ 22 日条ー

＜連 載＞

久々忠義：私の古代学 (33) 越中富山の発掘調査と地域史研究

近藤好和：＜『江家次第』にみる朝廷儀礼の式次第＞ (13) 大嘗会 (八)

桑原久男：海外調査探訪 (4) 地中海東岸の遺跡を掘る

＜図版解説＞

角南辰馬：富田林市喜志南遺跡内で確認した浮ヶ澤古墳について

＜書 評＞

渡邊 誠：篠崎敦史著『平安時代の日本外交と東アジア』

家原圭太：古閑正浩著『平安京と近京圏の形成史』

＜新刊紹介＞

日向一雅：隴谷寿著／伊東ひとみ編集協力『平安京の四〇〇年 王朝社会の光と陰』

第 76 巻第 2 号 (2024 年 9 月) 通巻 637 号

＜論 攷＞

越川真人：平安時代中・後期の牛飼童と貴族社会

三浦雄城：両漢期における礼制と緯書ー莽新期・後漢初期の礼制に注目してー

＜特輯 弥生系高地性集落の再考論 補遺＞

兪 炳瑒：韓国の青銅器時代高地性集落

＜史料紹介＞

山田邦和：『百舌鳥野耳原山陵図』について

＜研究展望・動向＞

萩野谷悟：茨城県常陸大宮市における弥生時代再葬墓の調査研究

森岡秀人：弥生時代中期後半の自然科学的実年代はいったいどうなったのか

—大阪府池上曽根遺跡の大型建物使用木柱の年輪年代再測定をめぐる学界の緊急動向—

菱沼一憲：元木泰雄・佐伯智広・横内裕人著『平氏政権と源平争乱 京都の中世史2』を読む

佐藤雄基：野口実・長村祥知・坂口太郎著『公武政権の競合と協調 京都の中世史3』を読む

＜註 釈＞

板井文子：『小右記』註釈（37）—長和4年6月23・24日条—

＜連 載＞

小嶋芳孝：〈私の古代学〉（34）渤海考古学への道程

近藤好和：〈『江家次第』にみる朝廷儀礼の式次第〉（14）大嘗会（九）

長谷川修一：〈海外調査探訪〉（5）続・地中海東岸の遺跡を掘る

＜書 評＞

本庄総子：今津勝紀著『日本古代の環境と社会』

鷺森浩幸：上村正裕著『日本古代王権と貴族社会』

梶原義実：斎野裕彦著『最北の国分寺と蝦夷社会—仙台平野からみた律令国家—』

村元健一：宇都宮美生著『隋唐洛陽の都城と水環境』

＜新刊紹介＞

野口 剛：相澤央著『雪と暮らす古代の人々』

森岡秀人：中村大介『青銅器が変えた弥生社会 東北アジアの交易ネットワーク』

第76巻第3号（2024年12月）通巻638号

＜論 攷＞

アンデルセン エミル マルテ：渡来系の人の個人名と同化—亡命百濟・高句麗系の人の例を中心—

伍 雅涵：魏晋南北朝時代における青銅製鐎斗の展開

＜特輯「古代ギリシア史研究の現在地（4）ジェンダーと家族」＞

高橋亮介：特輯「古代ギリシア史研究の現在地（4）ジェンダーと家族」に寄せて

小山田真帆：古典期から初期ヘレニズム期ギリシアにおける性認識—身体・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる—

竹内一博：前4世紀アッティカの呪詛板とジェンダー

森谷公俊：マケドニアと初期ヘレニズム時代の王族女性と王権

高橋亮介：家族としての帝国、家族としての都市—ローマ帝政期の小アジアの都市の事例から—
遠藤直子：ローマ期アテナイの女性とまつりごと—ギリシア語碑文に残ること—

- 小坂俊介：エウドクシアの時代 ―コンスタンティノープル発展期の帝室女性とジェンダー―
- <研究展望・動向>
- 朝川美幸：被災文化財の保全活動の現状や課題
- <註 釈>
- 近藤公子：『小右記』註釈 (38)―長和4年6月25・26日条―
- <連 載>
- 近藤好和：〈『江家次第』にみる朝廷儀礼の式次第〉(15) 大嘗会(十)
- <追 悼>
- 美川 圭：元木泰雄先生のご逝去
- <図版解説>
- 川部浩司：奈良時代の斎王宮殿域と正殿―国史跡斎宮跡の調査成果―
- <書 評>
- サイモン・ケイナー：根岸洋著『縄文と世界遺産：人類史における普遍的価値を問う』
- 中野高行：森公章著『倭国の政治体制と対外関係』
- 佐川英治：目黒杏子著『漢王朝の祭祀と儀礼の研究』
- 第76巻第4号(2025年3月)通巻639号**
- <論 攷>
- 吉江 崇：外記政の衰退に関する覚書
- 陳 永強：須恵器環状瓶の系譜と展開 ―東アジアにおける環状瓶の再考―
- ＜特輯 儀礼具から東北地方の「弥生文化」を考える＞
- 斎野裕彦：「儀礼具から東北地方の「弥生文化」を考える」に寄せて
- 高瀬克範：北海道・サハリンの儀礼具
- 三浦一樹：東北地方北・中部太平洋側の儀礼具
- 佐藤祐輔：東北地方南部の儀礼具
- <史料紹介>
- 川添和暁：岩手県中沢浜貝塚採集の軍配形骨器について
- <研究展望・動向>
- 岩田慎平：摂関・院政期研究の現状―『摂関・院政期研究を読みなおす』を手がかりに―
- 宮田敬三：源平合戦研究の可能性―川合康氏・勅使河原拓也氏の書評を承けて―
- <註 釈>
- 佃 美香：『小右記』註釈 (39)―長和4年6月27～30日条―
- <連 載>
- 丹羽野裕：〈私の古代学〉(35) 私の発掘調査歴
- 近藤好和：〈『江家次第』にみる朝廷儀礼の式次第〉(16) 大嘗会(十一)
- <追 悼>
- 西本昌弘：米田雄介先生を偲ぶ
- <図版解説>

長島雄一：福島県河沼郡柳津町池ノ尻遺跡出土の人体像把手付土器^{じんたいざうとつてつきどき}
＜書 評＞

村田麻里子：野口淳・村野正景編『博物館 DX と次世代考古学』

＜新刊紹介＞

古藤真平：大隅清陽著『菅原道真 神になった天才詩人』

家塚智子：野口孝子著『平安貴族の空間と時間 藤原道長の妻女と邸宅の伝領』

山田邦和：梶川敏夫著『ビジュアル再現 平安京 一地中に息づく都の栄華一』

6. 普及事業

(1) 古代学講座

平成 23（2011）年より、新たな形でスタートした。少人数で楽しく受講できる内容であり、多くのリピーターに支えられている。大半が継続講座であり、単に講師の話聞くだけにとどまらず、積極的な学びの場を提供している。令和 6（2024）年度は、前期（4 月～9 月）に 11 講座、後期（10 月～3 月）に 11 講座を開講した。

《2024 年度 前期講座》

◆座学と現地散策で学ぶ考古学の成果

講師名：梶川 敏夫（元京都市考古資料館館長）

京都での考古学の成果を活かしながら歴史を学ぶことと合わせて、実際に現地を訪れ、臨地で楽しく歴史の実態を学ぶことにより、歴史上の史実を分かりやすく理解し知ることを目指す。

第 1 回 4 月 10 日（水）平安貴族が愛した庭園遺構を探る

第 2 回 5 月 8 日（水）フィールドワーク 宇治市に藤原氏ゆかりの「宇治陵」を巡る

第 3 回 6 月 12 日（水）フィールドワーク 紫式部も訪ねた藤原氏ゆかりの大原野神社と花の寺
「勝持寺」を訪ねて

第 4 回 7 月 10 日（水）平安時代の京都の風景の再現

第 5 回 9 月 11 日（水）平安京を取り巻く山林寺院の世界

◆藤原道長時代の仏師と仏像

講師名：根立 研介（公益財団法人美術院 理事長・京都大学名誉教授）

摂関政治の絶頂期である藤原道長の時代（10 世紀末から 11 世紀第一四半期頃）は、いわゆる国風文化の花開いた時代で、仏像制作の分野では和様と言われる穏やかな顔立ちと均整の取れた美しい像容の仏像様式が大成された時代である。この時期に登場するのが、前代までの仏師とは異なり、僧籍を有しながらも大規模な私工房を構える仏師たちで、その代表は康尚（こうじょう）と定朝（じょうちょう）である。彼らの事績と遺品を追いながら、道長時代とそれに続く子息頼通時代の仏像がどのようなものであり、定朝によって大成された和様がいかなるものであったかを語る。

第 1 回 4 月 3 日（水）康尚の事績

第 2 回 5 月 15 日（水）和様彫刻（法金剛院に伝えられる国宝阿弥陀如来像）の現地見学

第3回 6月5日(水) 同聚院不動明王像と康尚活躍期の仏像遺品

第4回 7月3日(水) 定朝の事績

第5回 9月4日(水) 平等院鳳凰堂阿弥陀如来像

◆桓武朝の歴史考古学―長岡京編2―

講師：山中 章(三重大学名誉教授・古代学協会客員研究員)

「幻の都」などと称された長岡京は、1954年から始まる発掘調査と文献史学、歴史地理学からの研究によって具体的な姿が蘇りつつある。奈良時代から平安時代へと時代が大きく変化する契機をなしたのが長岡京である。桓武天皇の治世(781～806年)全体を主に考古資料を用いながら、様々な事象の「変化」をキーワードに紹介する。

第1回 4月24日(水) 長岡宮造営の準備

第2回 5月22日(水) 水陸交通の大工事・三国川改作

第3回 6月26日(水) 内裏の移転と後期の造営

第4回 7月24日(水) 市と交易

第5回 9月25日(水) 長岡京の都市交通

◆天皇陵研究の最前線

講師：山田 邦和(同志社女子大学特任教授・古代学協会理事)

日本古代史の重要テーマのひとつとして、陵墓研究がある。巨大古墳は古墳時代研究の基本資料であり、京都の各地に点在する平安時代以降の天皇陵も歴史の謎を秘めている。最新の研究成果に基づき、古代から近代までの陵墓の実態を明らかにする。

第1回 4月19日(金) 佐紀盾列古墳群の天皇陵

第2回 5月17日(金) 中世城館と天皇陵―安康・安閑天皇陵―

第3回 6月21日(金) 怨霊となった天皇―崇徳天皇陵―

第4回 7月19日(金) 葛城の天皇陵―顕宗・武烈天皇陵と飯豊皇女陵―

第5回 9月20日(金) 近代の天皇陵―明治・大正・昭和―

◆古代エジプト王妃の光と影

講師：小山 雅人(エジプト学研究者)

ピラミッド時代から末期サイス朝まで様々な史料から、歴史の本にあまり書いていない王妃にまつわる話を紹介。

第1回 4月27日(土) 濡れ衣を着せられた王妃 ウレトヤムテス王妃の名誉を回復する

第2回 5月25日(土) 駆け落ちした王妃か？謎の偽扉形石碑

第3回 6月22日(土) 王の貴妃 王妃に次ぐ名誉の女性たち

第4回 7月27日(土) 神妻と崇神女 王妃よりも名誉・権力・財力のあった女性たち

第5回 9月28日(土) キュレネーから来た王妃 エジプト史上最初で最後の外国人王妃

◆考古学からの探求 豊臣から徳川へ―城石垣の技術革新と石材調達の変化を考える―

講師：森岡 秀人（古代学協会客員研究員）

この50年、城郭の発掘調査が著しく進展し、30年前からは石垣築造には欠かせない石切場の発掘調査や分布調査が増加。講座では考古学研究の手法により、豊臣期から徳川期の天下人の城を見直す。消費の場である石垣、生産の場である石切場の双方の発掘調査や観察調査がドッキングすることにより、新たな研究の視野が開け、刻印の見方や解釈、矢穴技法による石材調達の真価を学ぶことによって、今から400年前の技術力の持続と断絶の歴史像を考える。新たな「豊徳」期提唱の意義を検討する。

第1回 4月24日（水）織豊期に対しての「豊徳」期提唱、城造りの進化の考古学

第2回 5月22日（水）大坂城現地講座 石垣刻印・矢穴技法研究・割普請の見どころ・聞きどころ

第3回 6月26日（水）天下人の城、指月伏見城と伏見山伏見城 発掘と踏査

第4回 7月24日（水）豊臣大坂城と徳川大坂城、石切場調査の進展

第5回 9月25日（水）総覧 2023年の考古学界、古代史界

◆文献史料と発掘成果から読み解く古代史―飛鳥時代から奈良時代まで―

講師：西本 昌弘（関西大学文学部教授）

文献史料を読み直し、発掘成果を活用することで、古代の難波や飛鳥・長岡の王宮・古墳・寺院などをめぐる問題について、最新の研究動向を踏まえながら、通説とは異なる新たな見方が成り立つ可能性を考えてみる。

第1回 4月17日（水）古代難波地域史の最前線

第2回 5月15日（水）小墾田宮の位置を探る

第3回 6月19日（水）牽牛子塚古墳と斉明天皇

第4回 7月17日（水）古代難波における行基の活動

第5回 9月18日（水）長岡宮内裏と政治改革

◆講座名：『源氏物語』を読み解く（一）紫式部の日記を読む

講師：中 周子（大阪松蔭女子大学名誉教授）

『源氏物語』を、和歌によって発展してきた日本独自の表現、自然感情や美意識を基盤にして成立した物語であるという観点から、読み解いてゆく。まず、「物語作者・紫式部」の鋭い観察眼と卓越した描写力を探るべく『紫式部日記』を取り上げ、前期は現存伝本が有する問題点（成立の謎）をふまえた上で、中宮彰子が皇子を出産する前後（寛弘五年）の記事から、宮仕え女房として記録する姿勢、物語作者ならではの人間観察と人物描写・批評の方法を読み取る。

第1回 4月27日（土）『紫式部日記』成立の謎

第2回 5月25日（土）宮仕え女房の視線

第3回 6月22日（土）『源氏物語』作者の視線

第4回 7月27日（土）人物描写と批評の方法

第5回 9月28日（土）『紫式部日記絵詞』に描かれた日記の世界

◆古代の日朝関係史

講師：田中 俊明（滋賀県立大学名誉教授・古代学協会客員研究員）

朝鮮半島の諸国・諸勢力と日本との関係について詳しくみていきたい。かつて山尾幸久『古代の日朝関係』（塙書房、1989）という好著があったが、時間もたち、改めるべき点もふえてきている。そのことを意識しながら、古代の日朝関係史の基礎的で入門講座的な内容にする。

第1回 4月17日（水）楽浪郡と朝鮮・日本

第2回 5月15日（水）3世紀の朝鮮半島と日本

第3回 6月19日（水）狗邪国と倭

第4回 7月17日（水）百済・加耶南部・倭の同盟

第5回 9月18日（水）『七支刀』からみた日朝関係

◆『小右記』講読—平安貴族の日常に触れてみよう—

講師：野口 孝子（古代学協会客員研究員）

藤原彰子が一条天皇に入内する長保元年（999）11月条を継続して読む。本文内容や、解釈に必要な知識など講義形式で行い、本文の一部は、受講者による発表（希望者のみ）と質疑という形も取りいれていく。

第1回 4月10日（水）長保元年11月1日条。長保元年についての解説。

第2回 5月8日（水）承前

第3回 6月12日（水）承前

第4回 7月17日（水）承前

第5回 9月11日（水）承前

◆平安王朝の歴史と文化

講師：臈谷 壽（同志社女子大学名誉教授・古代学協会理事長）

平安京という風土のなかで展開される王朝社会の政治の大きな流れの一方で、文化、宗教、様々な暮らし、そして今に息づく祭礼や年中行事が営まれた。京の地に刻みこまれた営みを通して王朝四百年の歴史を探る。

今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」は紫式部を主人公に、みやびな平安貴族の世界を描いているが、平安時代の諸相について講座を通して史実を学んでいく。

第1回 4月3日（水）内容：平安王朝の世界（48）

第2回 5月1日（水）内容：平安王朝の世界（49）

第3回 6月5日（水）内容：平安王朝の世界（50）

第4回 7月3日（水）内容：平安王朝の世界（51）

第5回 9月4日（水）内容：平安王朝の世界（52）

《2024年度 後期講座》

◆古代女帝の素顔

講師：瀧浪 貞子（京都女子大学名誉教授）

わが国では八人の女帝が即位している。このうち六人（推古・皇極・持統・元明・元正・孝謙）が飛鳥から奈良時代にかけて登場した。奈良時代の六人の女帝たちはそれぞれの役割を担いながら使命を果たし、精一杯その時代を生き抜いた。女帝たちの役割を通して古代の歴史を明らかにするとともに、その生き様についても考える。（3回講座）

第1回 10月18日（金）推古天皇 ～なぜ女帝が即位したのか～

第2回 11月15日（金）持統天皇 ～壬申の乱を勝ち抜いた女帝～

第3回 1月17日（金）孝謙（称徳）天皇 ～男帝に仕立てられた女帝～

◆土偶・土面から探る縄文時代

講師：大野 薫（元大阪府立狭山池博物館学芸課長）

土偶・土面の形や出土状態を踏まえ、縄文時代の祈りや祭りを探る。

第1回 10月16日（水）縄文時代の暮らしと文化

第2回 11月27日（水）土偶の形

第3回 1月22日（水）土偶をわざと壊す

（講師事情により3回講座に変更）

◆平安王朝の歴史と文化

講師：臈谷 壽（同志社女子大学名誉教授・古代学協会理事長）

平安京という風土のなかで展開される王朝社会の政治の大きな流れの一方で、文化、宗教、様々な暮らし、そして今に息づく祭礼や年中行事が営まれた。京の地に刻みこまれた営みを通して王朝四百年の歴史を探る。

今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」は紫式部を主人公に、みやびな平安貴族の世界を描いているが、平安時代の諸相について講座を通して史実を学んでいく。

第1回 10月2日（水）平安王朝の世界（53）

第2回 11月6日（水）平安王朝の世界（54）

第3回 12月4日（水）平安王朝の世界（55）

第4回 2月5日（水）平安王朝の世界（56）

第5回 3月5日（水）平安王朝の世界（57）

◆『小右記』講読—平安貴族の日常に触れてみよう—

講師：野口 孝子（古代学協会客員研究員）

前期に引き続き藤原彰子が一条天皇に入内する長保元年（999）11月条を読む。本文内容や、解釈に必要な知識などを講義形式で行い、本文の一部は、受講者の発表（希望者のみ）と質疑という形も取り入れていく。

第1回 10月9日（水）長保元年11月8日条～10日条

第2回 11月13日（水）承前

第3回 12月11日（水）承前

第4回 2月12日（水）承前

第5回 3月12日(水) 承前

◆座学と現地散策で学ぶ考古学の成果

講師：梶川 敏夫（元京都市考古資料館館長）

京都での考古学の成果を活かしながら歴史を学ぶことと合わせて、実際に現地を訪れ、臨地で楽しく歴史の実態を学ぶことにより、歴史上の史実を分かりやすく理解し知ることを目指す。

第1回 10月9日(水) 平安時代前期、仁明天皇女御の皇太后「藤原順子(のぶこ)」御願の「安祥寺」について

第2回 11月13日(水) フィールドワーク 安祥寺(下寺)の特別拝観と旧下寺跡推定地の見学

第3回 12月11日(水) フィールドワーク 平安宮跡から藤原道長の土御門殿跡(京極殿)と法成寺跡を訪ねて

第4回 2月12日(水) 『源氏物語』の舞台、平安宮(大内裏)跡の調査成果とその復元

第5回 3月12日(水) 平安京周辺に建立された平安時代創建の山林寺院の実態について

◆古代の日朝関係史

講師：田中 俊明（滋賀県立大学名誉教授・古代学協会客員研究員）

古代朝鮮半島の諸国・諸勢力と日本との関係について詳しくみていく。後期は『広開土王碑』や神功皇后の三韓征伐などから日朝関係を考える。

第1回 10月16日(水) 『広開土王碑』からみた日朝関係

第2回 11月20日(水) アメノヒボコ伝説

第3回 12月18日(水) 神功皇后を考える

第4回 2月19日(水) 葛城襲津彦を考える

第5回 3月19日(水) 朴堤上伝説

◆天皇陵研究の最前線

講師：山田 邦和（同志社女子大学特任教授・公益財団法人 古代学協会理事）

日本古代史の重要テーマのひとつとして、陵墓研究がある。巨大古墳は古墳時代研究の基本資料であり、京都の各地に点在する平安時代以降の天皇陵も歴史の謎を秘めている。この講座では、最新の研究成果に基づき、古代から近代までの陵墓の実態を明らかにする。

第1回 10月18日(金) 皇室の菩提寺「御寺」～泉涌寺と月輪陵

第2回 11月15日(金) 文徳天皇の母・太皇太后藤原順子陵

第3回 12月20日(金) 琉球王国の王陵

第4回 2月21日(金) 日本武尊と倭彦命の墓

第5回 3月21日(金) 悲劇の幼帝・安德天皇の陵と平家伝説

◆邪馬台国論争近畿論の新しい考古学研究のうごき

講師：森岡 秀人（古代学協会客員研究員）

邪馬台国論争に不可欠な柔軟性をいくつも提示し、少しでも真の歴史像に迫ってみたい。初心者にもわかりやすく、日本考古学の研究の進展の醍醐味も伝えていく。

第1回 10月23日(水) 卑弥呼擁立社会の基本問題の整理

第2回 11月27日(水) 邪馬台国前史としての弥生時代後期の近畿北部

第3回 1月22日(水) 東伝の大陸系文物と淀川・琵琶湖軸ルート

第4回 2月26日(水) 伊勢遺跡の構造と変遷の謎—卑弥呼がみた祭祀施設?—

第5回 3月26日(水) 銅鐸から銅鏡への実相

◆桓武朝の歴史考古学—長岡京編 3—

講師：山中 章(三重大学名誉教授・古代学協会客員研究員)

桓武天皇の治世(781～806年)全体を主に考古資料を用いながら、様々な事象の「変化」をキーワードに紹介。後期は「転換点としての長岡京」をモノの変化から読み解く。

第1回 10月23日(水)「文化・技術・流通の大変化①」カラフルな食卓～緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器の生産～

第2回 11月27日(水)「文化・技術・流通の大変化②」文字の個人化～円面硯から風字硯へ～

第3回 1月22日(水)「文化・技術・流通の大変化③」装束の変化～宝石を付けた鍔帯金具～

第4回 2月26日(水)「文化・技術・流通の大変化④」物流の変化～壺Gの生産と流通～

第5回 3月26日(水)「文化・技術・流通の大変化⑤」引き締まった仏の顔～願徳寺から羅城門へ～

◆『源氏物語』を読み解く(二) 紫式部の実詠歌を読む

講師：中 周子(大阪樟蔭女子大学名誉教授)

『源氏物語』を、和歌によって発展してきた日本独自の表現、自然感情や美意識を基盤にして成立した物語であるという観点から、読み解いてゆく。

今回は、『源氏物語』を読み解く前段階として、紫式部が実人生において詠じた和歌を、『源氏物語』との関係という視点から読み解く。

第1回 10月19日(土) 勅撰集に見る紫式部の和歌

第2回 11月23日(土)『紫式部日記』の和歌

第3回 1月25日(土)『紫式部集』と『源氏物語』(1)

第4回 2月22日(土)『紫式部集』と『源氏物語』(2)

第5回 3月22日(土) 紫式部の実詠歌と『源氏物語』

◆古代エジプトの人情噺

講師：小山 雅人(エジプト学研究者)

古代エジプトの石碑には、国家的出来事や王業績を伝える大きなものもあるが、貴族や限りなく庶民に近い人々の生活を伺えるものもある。死後の埋葬や供物を願う偽扉(古王国)や供養碑(中王国以降)は墓碑銘である。決まりきった書式のなかに、その人の個性や生前の様子を想像できるもの、同情できるものを選び紹介する。

第1回 10月26日(土) 出世した孫のおばあちゃん孝行(第4王朝)

第2回 11月23日(土) 落ちぶれ貴族のお姫様(第7～8王朝)

第3回 1月25日(土) 食いしん坊の豎琴弾き(第12王朝)

第4回 2月22日(土) 残念なお父さんの供養碑(第17王朝)

第5回 3月22日(土) 死んだらどうなるの?(第19王朝)



隴谷先生講座
(大島本源氏物語をみでの講義)



隴谷先生講座
(実物史料をみでの講義)



講座室での森岡先生講座



山田先生の現地散策講座
(京都市山科区日向大神宮)



梶川先生の現地散策講座
(京都御所)

(2) 顕彰碑の設置除幕式・修理

- ・「一条天皇皇后 藤原定子二条宮跡」顕彰碑・解説板の設置
(京都市中京区室町通二条下ル蛸薬師町 271)

除幕式 日時: 令和6年9月4日

来賓: ぜんかしやういん 然花抄院代表取締役 荒木志華乃氏

こんに 誉仁(株)代表取締役 矢代 一氏

古代学協会 理事長・隴谷 壽、理事・山田邦和

- ・平安京朝堂院跡解説板修理(京都市中京区聚楽廻東町 りそな銀行千本支店東南門角)



(3) 公開講演会など

1) 2025 年度第1回公開講演会(共催: 京都府立京都学・歴彩館)

日時: 令和6年9月21日 13時～15時30分

会場: 京都府立京都学・歴彩館大ホール(京都市左京区下鴨半木町 1-29)

参加人数: 300名

参加費: 1000円(資料代含む)

テーマ: 紫式部と源氏物語

『史実でたどる紫式部―『源氏物語』は、こうして生まれた。』出版記念

<講演>

山本淳子(京都先端科学大学教授、古代学協会参与)

「紫式部―時代・人生・『源氏物語』」

<トークセッション>

隴谷 壽(古代学協会理事長・同志社女子大学名誉教授)



山本淳子先生

山田邦和（古代学協会理事・同志社女子大学特任教授）

中田 昭（写真家）

日山正紀（京都新聞社報道部次長）

大西律子（光村推古書院編集長）

司会：山田邦和



トークセッションの様子

2) 2025 年度連続講座（共催：京都府立京都学・歴史館）

会場：京都府立京都学・歴史館 1 階小ホール

全 7 回、延べ参加人数：564 名

参加費：各回 1000 円（資料代含む）

テーマ 紫式部の生きた王朝時代

講座内容

- 1 6月 1日 赤澤真理（大妻女子大学准教授）「女房装束と出衣」
- 2 7月 6日 臈谷 壽（古代学協会理事長・同志社女子大学名誉教授）「紫式部と平安京」
- 3 9月 14日 栗本賀世子（慶應義塾大学准教授）「天皇の寵愛争い—後宮の世界」
- 4 9月 29日 吉岡更紗（染司よしおか六代）「『源氏物語』と色」
- 5 10月 30日 畑 正高（香老舗 松栄堂 主人）「『源氏物語』と香り」
- 6 11月 16日 中 周子（大阪松蔭女子大学名誉教授）「『源氏物語』の恋と与謝野晶子」
- 7 11月 29日 黒田幸也（京都神祇調度装束協同組合理事長）「王朝貴族の装い」



赤澤真理先生の講座の様子



畑正高先生講座の様子

3) 写真展（香老舗 松栄堂共催）

- ・写真家 中田 昭 紫式部と『源氏物語』の世界

期間：10月24日～30日

会場：松栄堂薫習館1階 松吟ロビー

（京都市中京区烏丸通二条上ル東側）

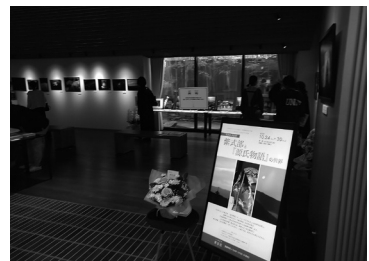
- ・同企画トークセッション

会場：松栄堂薫習館5階

日時：令和6年10月29日 13:00～15:00

参加者：88人

中田 昭、畑 正高（香老舗 松栄堂 主人）、臈谷 壽



松栄堂薫習館での写真展

4) パネル展

会場：京都府立京都学・歴史館京都学ラウンジ

内容：「公益財団法人古代学協会の歩みとその事業」

期間：2024年12月12日（木）～2025年1月31日（金）



歴史館でのパネル展

(4) 広報物の出版

1) 公益財団法人古代学協会 2023 (令和 5) 年度年報 (令和 6 年 8 月 30 日発行)

・令和 5 年度事業報告

2) 古代学協会だより『土車』

第 150 号 (令和 6 年 6 月 20 日発行)

第 151 号 (令和 6 年 9 月 20 日発行)

第 152 号 (令和 6 年 12 月 20 日発行)



(5) 資料等の活用・管理・整理

1) 所蔵資料の活用

当協会では、創立以来、研究活動の為、文献・考古学資料を収集してきた。資料は一部を京都府京都文化博物館に寄託し、一般や公共機関、研究機関、研究者の利用希望に応じて、可能な限り資料を提供している。資料提供には資料調査等に係る閲覧や貸出及び掲載許可申請がある。

令和6年度資料貸出等

利用形態	資料名	数	申請者	使用目的等
出陳	大島本源氏物語	2	斎宮歴史博物館	『源氏物語と斎宮一王朝のきらめき 光る君の栄華』（会期：令和6年4月20 日～令和6年6月28日）
調査	『兵範記』切		山田伸武	藤原定家写本『兵範記』に関する学術 論文執筆
調査	角田文衛博士遺贈資 料書簡及び日記		伊藤大介（東北学院 大学）	喜田貞吉に関する研究
出陳	院宮及び私第図	1	京都文化博物館	『足利将軍、京都に住まう。』（会 期：令和6年8月3日～令和6年9月23 日）
写真掲載	紫式部日記絵詞・紫 式部日記絵巻断簡	2	上原作和	『みしやそれとも一考証・紫式部の生 涯』（武蔵野書院 刊）
出陳	紫式部集・紫式部日 記絵巻断簡「秋のけ わひ、」、紫式部 日記絵巻断簡「わた との、」、	2		写真展 中田昭「紫式部と『源氏物 語』（会期：令和6年10月24日～10 月30日）
調査	アコリス出土 コブ ト織		小林桂子・ひろいの ぶこ	研究
調査	平安博物館設置 清 涼殿実物大模型設計 図面等		赤澤真理（大妻女子 大学）	研究



伊藤大介氏による調査風景



山田伸武氏による調査風景

2) 図書資料の収集・活用

古代学協会がこれまで刊行してきた刊行物、角田文衛博士より寄贈された、国内外の貴重な図書、研究活動に必要な基礎図書及び、国内外から交換及び寄贈された最新の定期刊行物を一部公開している。

角田文衛博士から協会に寄贈された書籍については、整理され次第順次協会ホームページに一覧表を掲載する予定である。

3) 角田文衛博士遺贈資料の整理

角田文衛博士の御遺族から寄贈された、書簡・写真・研究資料等を公開すべく整理作業を進め古代学協会研究報告第15輯『角田文衛博士遺贈資料調査報告―書簡集―』（令和元年10月）の刊行に続き、古代学協会研究報告第17輯『旧制中・高等学校における角田文衛の考古学的調査―角田文衛博士遺贈写真目録―』（令和6年3月）を刊行している。

7. その他

(1) ホームページ (<https://kodaigaku.org>) (2007 年 9 月開設、2022 年 7 月リニューアル)

- ・ 情報公開：事業報告（平成 25 年度～）、役員名簿・定款・一部規程類、出版物・発掘調査・科学研究費助成事業に関わる規程
- ・ 所蔵資料一覧
- ・ 賛助会員入会案内
- ・ 角田文衛博士の紹介
- ・ 『古代文化』：投稿規定、投稿案内、正会員案内、総目次、最新巻案内
- ・ 『土車』（創刊号～最新号）
- ・ 公開講演会案内
- ・ 古代学講座案内
- ・ その他随時情報を更新

(2) 公式 Facebook（2012 年 9 月 22 日開始）

協会の活動に関する告知とともに、幅広いファン層の拡大を目的としている。

- ・ 古代学講座および講演会案内
- ・ その他随時情報提



ホームページトップ画面

所蔵資料一覧

1. 文献・絵画・彫刻等の資料

部類	資料名等	点数・員数	時代	
古文書	太政官謹奏写（天平宝字二年）	1・1紙	鎌倉	※
	近江国大國郷墾田立券文（延暦十五年）	1・1幅	平安	※
	大和国真菅老女墾田立券文写（延暦十九年）	1・1幅	江戸	※
	勅旨所牒（延暦八年）	1・1幅	鎌倉	※
	七条令解（延長七年）	1・1幅	平安	※
	七条令解（天曆三年）	1・1幅	平安	※
	七条令解（天元二年）	1・1幅	平安	※
	東大寺返抄（長保二年）	1・1幅	平安	※
	太政官牒（応徳三年）	1・1幅	平安	※
	僧長俊楳傳請文（天治二年）	1・1幅	平安	※
	法隆寺伝教院下文（天治二年）	1・1幅	平安	※
	畠直米請取状（長承二年）	1・1紙	平安	※
	大和国広瀬荘白米上納日記（長承～久安年間）	1・1幅	平安	※
	太政官牒（仁平元年）	1・1幅	平安	※
	高向依重事発日記（応保元年）	1・1紙	平安	※
	卷数案文書（嘉応二年）	1・1幅	平安	※
	勸修寺西院牒（寿永元年）	1・1紙	平安	※
	後白河院院宣（建久三年）	1・1幅	鎌倉	※
	沽却状（建久三年）	1・1幅	鎌倉	※
	北白河院陳子自筆御消息（寛喜三年）	1・1幅	鎌倉	※
典籍	僧空寂書状（嘉禎四年）	1・1幅	鎌倉	※
	京・上京区下柳原町屋文書	61・56冊+5袋	江戸	※
	山城国葛野郡西京村検地帳（延宝七年）	1・1冊	江戸	※
	太政官謹奏（文政元年五月二十八日）	1・1通	江戸	※
	『明月記』建保元年正月十六日条断簡 付妓女図	藤原定家筆 1・1幅	鎌倉	※
	『兵範記』切（仁安二年閏七月二十五日条）	藤原定家筆 1・1幅	鎌倉	※
	魚魯愚鈔（明応三・五年写）	三条西実隆筆 10・10冊	室町	※
	続日本後紀卷七・八	1・1冊	江戸	※
	本朝皇胤紹運録	1・1冊	江戸	※
	大内裏図考証 付絵図	裏松固禪編 70・69冊+1巻	江戸	※
	院宮及私第図	裏松固禪編 2・2巻	江戸	※
	拾芥抄（活字本）	6・6冊	江戸	※
	京兆図（享和三年写）	1・1図	江戸	※
	清辨眼抄（宝暦十一年写）	1・1冊	江戸	※
	聖蹟図志（安政元年）	2・2冊	江戸	※
	首註陵墓一隅抄（安政元年）	1・1冊	江戸	※
	集古浪華帖第一～五	5・5冊	江戸	※
	宇多天皇記略写本	1・1冊	江戸	※
	経信卿記写本	2・2冊	江戸	※
地図・ 絵図類	三長記写本	2・2冊	江戸	※
	舞楽図（元版文政六年刊）	2・2冊	近代	※
	尚古図録	1・1冊	近代	※
	輿車図考附図	2・2冊	近代	※
	平安京条坊図	伊藤東涯編 1・1幅	江戸	※
	京程図	1・1図	江戸	※
	左京図	1・1図	江戸	※
	大内裏図	1・1図	江戸	※
	内裏絵図（大工見取図）	1・1図	江戸	※
	宮殿図	紀宗直自筆 1・1図	江戸	※
神泉苑差図写（長禄三年）		1・1図	江戸	※

部類	資料名等	点数・員数	時代	
	京大絵図（元禄十二年）	1・1図	江戸	※
	洛中洛外図（享保六年填写）	2・2図	江戸	※
	禁裏御用水筋並小山郷用水図	1・1図	江戸	※
	下鴨地検図（文化二年）	1・1図	江戸	※
	葛野郡西七・八条村図	1・1図	近代	※
	元治元年七月十九日京都大火之略図版画	1・1枚	江戸	
	山城国愛宕郡図版画	1・1図	江戸	
	大内裏惣図（天）	1・1図	江戸	
	八省院大図（地）	1・1図	江戸	
	御即位庭上之図	1・1図	江戸	
	大和山陵図（水木コレクション）	1・1巻	江戸	
	道澄寺鐘銘拓本（水木コレクション）	1・1巻	近代	
文学書	源氏物語（青表紙本）〔重要文化財。通称「大島本源氏物語」〕	飛鳥井雅康ほか筆 53・53冊	室町	※
	伊勢物語（天福本）	伝飛鳥井雅親筆 1・1帖	室町	※
	紫式部日記断簡	2・1巻※+1片	南北朝	(※)
	紫式部集（安行君遺本）	1・1冊	江戸	※
	水鏡	伝寂蓮筆 1・1巻	室町	※
	栄花物語巻七～四十	14・14冊	江戸	※
聖教	大般若経巻第五百八十（永久三年）	1・1巻	平安	※
	大般若経巻第百三十五（久寿二年）	1・1帖	平安	※
絵画	鳥羽天皇宸影	1・1幅	平安	※
	承安五節図（寛政元年写）	1・1巻	江戸	※
彫刻	地藏菩薩木像（水木コレクション）	1・1軀	平安	
その他	三上参次自筆書簡	1・1通	近代	
	黒板勝美自筆書簡	1・1通	近代	
	水木家宛書簡類（水木コレクション）	262・262通	近代	
	中村直勝自筆書簡	1・1通	近代	
	黒板勝美一行書	1・1幅	近代	
	内藤湖南漢詩	1・1幅	近代	
	紫野閑記（新村出筆ノート。付八木勇一書簡）	1・1冊	近代	

2. 考古資料

	資料名	時代	点数	備考	
1	太田コレクション (丹生台地出土石器)		319	石器、銅剣、和鏡	※
2	大分県丹生遺跡出土旧石器	旧石器時代	5	石器	◎
3	円筒上層式土器	縄文時代	1	青森県天間林村二ツ森遺跡出土 角田文衛氏昭和13年発掘	
4	土偶	縄文時代晩期	1	埼玉県岩槻市真福寺遺跡出土	※
5	埴輪 (男子頭部)		1	関東地方出土	※
6	埴輪 (頭部)		1		
7	馬形埴輪	6世紀	1	出土地不詳 高76cm	※
8	陶製骨壺	奈良時代	1	宇治市木幡出土	※
9	皇朝十二銭		8	和同開珎、万年通宝、神功開宝、富寿 神宝、承和昌宝、長年大宝、貞観大 宝、延喜通宝	
10	松喰鶴鏡	平安時代	1		※
11	貨幣模造品		1	開基勝宝 (岩倉精密鑄造)	※
12	鬼瓦 (複製)	平安時代	1	原資料 平安宮朝堂院跡出土	※
13	貨幣模造品		1	開基勝宝	※
14	中国古銭集成		120	寛永通宝含む	
15	韓国慶州出土軒丸瓦	新羅時代 (8世紀)	1		
16	タンザニア・ オールドヴァイ遺跡出土石器類		10		※
17	タンザニア出土石器類		5		※
18	ケニア出土石器類		1		※
19	フランス旧石器コレクション	前期旧石器～ 後期旧石器時代	61		※
20	デンマーク石器コレクション	中石器～ 青銅器時代	32		※
21	デンマーク出土石器類 (北欧新石器)		20		※
22	デンマーク出土石器類 (北欧新石器)		26		※
23	ミノス文化青銅器		3	短剣、銀斧、銅鍬か	
24	ローマ時代貨幣		19	金貨、銅貨	※
25	ユーリナ・ドムナ銀貨		1		
26	ユーリナ・ドムナ頭部像		1	大理石製	
27	金倉英一氏エトルリア、 ローマ文化コレクション		70		
28	エジプト・アコリス遺跡 発掘調査 出土品一括		30	土器、コプト織り断片等	
29	パピルス写本片葉 コプト文字法律書断簡		1		
30	シリア・パルミラの石器	中期旧石器～ 新石器時代	19		
31	ルリスタン青銅器		11	銅剣、銀斧、腕輪、ヘアピン、人形、動 物像	
32	パキスタン・ソーアン遺跡 出土の旧石器コレクション	旧石器時代前期 (70 ～50万年前)	6		
33	仏頭		1	ガンダーラ出土か	※
34	骨壺	奈良時代末期	1	京都府乙訓郡長岡町井口出土	
35	灰釉壺	平安時代前期	1	京都市山科区御陵安祥寺付近出土	
36	銅製経筒	建久2 (1191) 年銘	1	福岡県太宰府町大字太宰府出土	
37	水木要太郎蒐集古瓦類	飛鳥時代～ 平安時代中期	15	古瓦14 (単弁蓮華文軒丸瓦・飛鳥寺出 土) 等、瓦経1 (伊勢市小町塚経塚出 土)	

※は京都文化博物館 ◎は大阪市立美術館寄託

令和6年度 交換・受贈逐次刊行物一覧

- 青山学院大学日文院生の会『緑岡詞林』
青山学院大学日本文学会『青山語文』
青山学院大学史学会『史友』
青山学院大学文学部 史学研究室『青山史学』
伊豆の国市教育委員会『文化財年報』
岩宿博物館『紀要 岩宿』
(公財)大倉精神文化研究所『大倉山論集』
大阪大谷大学歴史文化学科『歴史文化研究』
大阪大谷大学歴史文化学科歴史文化学専攻
『歴史文化論叢』
大阪教育大学歴史学研究室『歴史研究』
大阪商業大学比較地域研究所『地域と社会』
大阪大学国語国文学会『語文』
大阪公立大学『大阪府公大紀要 人間科学』
大阪府立弥生文化博物館『弥生文化博物館要覧』
大阪歴史博物館『大阪歴史博物館年報』
大妻女子大学国文学会『大妻国文』
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『紀要』
学習院大学史料館『学習院大学史料館紀要』
学習院大学東洋文化研究所
『調査研究報告』『東洋文化研究』
神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンス
リー』
神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究
センター『非文字資料研究』
金沢大学人文学類考古学研究室『金沢大学考古
学紀要』
(公財)元興寺文化財研究所『研究報告』
関西大学国文学会『國文學』
関西大学史学・地理学会『史泉』
関西学院大学史学会『関西学院史学』
九州大学大学院人文科学研究院『史淵』
京都産業大学日本文化研究所『所報 あふひ』
『京都産業大学日本文化研究所紀要』
京都市歴史資料館『紀要』
京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報
学研究センター『東方学資料叢刊』
京都橘大学『京都橘大学歴史遺産調査報告』
京都府立京都学・歴史館『京都学・歴史館紀要』
宮内庁正倉院事務所『正倉院紀要』
熊本史学会(熊本大学文学部内)『熊本史学』
藝林會『藝林』
皇學館大學史學會『皇學館史學』
皇學館大学人文学会『皇學館論叢』
考古学研究会『考古学研究』
神戸学院大学人文学部『人文学部紀要』
國學院大学大学院史学専攻大学院会『史学研究
集録』
古代学研究会『古代学研究』
古代史の海の会『古代史の海』
駒澤大学大学院史学会『駒澤大学大学院史学論
集』
(公財)史学会(東京大学文学部内)『史学雑誌』
史学研究会(京都大学大学院文学研究科)『史林』
滋賀県立安土城考古博物館『紀要』『年報』
滋賀県立大学『人間文化』
信濃史学会『信濃』
上智大学史学会『上智史學』
公益財団法人秀明文化財団『MIHO MUSEUM
研究紀要』
続日本紀研究会『続日本紀研究』
専修大学文学部『専修人文論集』
大正大学史学会『鴨台史学』
大東文化大學漢學會『大東文化大學漢學會誌』
大東文化大学歴史文化学会『大東史学』
地中海学会『地中海学研究』
地方史研究協議会『地方史研究』
中央大学文学部『紀要』
(公財)中信美術奨励基金『美術京都』
朝鮮学会『朝鮮学報』
筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専
攻

『筑波大学 先史学・考古学研究』『歴史人類』
筑波大学大学院人文社会科学研究科 文芸・言語専攻『文藝言語研究 文藝篇』
鶴見大学文化財学会『文化財学雑誌』
帝塚山大学文学部『帝塚山大学文学部紀要』
天理参考館『天理参考館報』
天理大学『天理大学学報 語学・文学・人文・社会・自然編』
東京国立博物館『東京国立博物館研究誌 MUSEUM』
東京大学史料編纂所『研究紀要』『所報』
東京文化財研究所『美術研究』
同志社大学人文学会『人文學』
同志社大学文化学会『文化学年報』
東北学院大学東北文化研究所『東北文化研究所 紀要』
東北大学大学院文学研究科『東北大学文学研究科研究年報』
東方学会『東方學報』
東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』『東北大学東北アジア研究センター叢書』
東洋史研究会『東洋史研究』
東洋大学『東洋大学文学部紀要（史学科篇）』
公益財団法人 東洋文庫『東洋学報』
読史会（お茶の水女子大学文学部教育学科内）『お茶の水史学』
徳島文理大学文学部『徳島文理大学 文学論叢』
徳島文理比較文化研究所『年報』
長野県考古学会『長野県考古学会誌』
『並木の里』の会『並木の里』
名古屋市博物館『研究紀要』
名古屋平安文学研究会『会報』
奈良女子大学史学会『寧楽史苑』
奈良大学文学部文化財学科『文化財学報』
南山考古文化人類学研究会『南山考人』
新潟史学会『新潟史学』
日本印度仏教学会『印度學佛教學研究』
日本オリエント学会『オリエント』

日本海事史学会『海事史研究』
日本史研究会『日本史研究』
日本人類学会『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE』
『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE (JAPANESE SERIES)』
日本西洋史学会『西洋史学』
日本歴史学会（吉川弘文館）『日本歴史』
白山史学会『白山史学』
東アジアの古代文化を考える会同人誌分科会『古代文化を考える』
平等院『鳳翔学叢』
廣島史学學研究會『史学研究』
文化史学会（同志社大学文学部内）『文化史学』
平凡社（神奈川大学日本常民文化研究所編集）『歴史と民俗』
法政大学史学会『法政史学』
法政大学文学部『法政大学文学部紀要』
北海道大学大学院文学研究室考古学教室『北海道大学文学部紀要』
（公財）北海道埋蔵文化財センター『調査年報』
三田史学会『史學』
立正大学史学会『立正史学』
龍谷史学会『龍谷史壇』
龍谷大学大学院文学研究科日本史学専攻『龍谷大学日本古代史論集』
早稲田大学国文学会『国文学研究』
早稲田大学史学会『史観』
早稲田大学美術史学会『美術史研究』

〈海外〉

中国 敦煌研究院『敦煌研究』

韓国 国史編纂委員会『国史編纂委員会会報』

台湾 國立臺灣大學藝術史研究所『美術史研究集刊』

フランス *ACADÉMIE DES INSCRIPTIONS & BELLES-LETTRES*

ポーランド *FOLIA QUATERNARIA*

イタリア *STUDI ETRUSCHI*

トルコ *BELLE TEN*

公益財団法人 古代学協会 令和6年度年報

発 行 日:令和7(2025)年8月31日
編集・発行:公益財団法人 古代学協会
〒604-8131
京都市中京区三条通高倉西入ル菱屋町48
電 話 (075)252-3000番
F A X (075)252-3001番
E-Mail paleo-j@kodaigaku.org
<https://www.kodaigaku.org>
